

第5章 関連文化財群の考え方

1 関連文化財群設定の方針及び考え方

本構想における「関連文化財群」とは、地域に存在する歴史文化資源（文化財等）を、指定・未指定（登録・未登録）、有形・無形等、既存の区分に関わらず、歴史的・地域的関連性に基づいて一定のまとまりとして幅広く捉えたものとする。

関連する複数の歴史文化資源（文化財等）を、本町の歴史文化の特徴から導き出されるストーリーに沿ってまとめることで、関連文化財群及び個別の歴史文化資源の魅力を一体的かつ相乗的に高めるとともに、より魅力的でわかりやすい形で価値を伝え、総合的な保存・活用につなげていく。

以下では、個々の歴史文化資源を結び付ける関連性を説明するものを「ストーリー」、ストーリーに沿って集められた歴史文化資源のまとまりを「関連文化財群」、関連文化財群を構成する各々の歴史文化資源を「構成資源」という概念で整理を行った。

2 国見町の関連文化財群

以下に本町の歴史文化の特徴を踏まえて考察した4つの関連文化財群を提示する。ストーリー及び関連文化財群の設定にあたっては、以下の点に留意した。

- ① 各ストーリーのタイトルは「主題」と「副題」で構成し、ストーリーの概要がタイトルからも伝わるよう努めた。
- ② 関連文化財群の構成資源は、関連性の説明の方法・内容によって膨大な数量となるため、本構想内でのストーリーの概要に合わせた代表的なものを掲載し、各構成資源の解説を加えた。
- ③ 構成資源には多様な価値を持つものもあるが、資源が属するストーリーとの関連性がより明瞭になるよう努めた。
- ④ 複数のストーリーに関連する資源については、解説文が重複しないよう工夫した。

構成資源の選定にあたっては、可能な限り以下の点に留意した。

- ⑤ 1つのストーリーに対して、時代・地域・種類の異なる多種多様な歴史文化資源を結び付け、本町が持つ魅力の発見につながるよう留意した。
- ⑥ 調査研究によって一定の価値が把握されており、ストーリーとの関連性が解説できるものを選択した。
- ⑦ 各関連文化財群には、中心的存在となりえる指定等文化財を含むこととした。

上記に伴い、本構想に未掲載の歴史文化資源でも、今後ストーリーとの関連性を見いだせるものは積極的な保存・活用に向けて、関連文化財群の構成資源として捉えていくこととする。

第4章「国見町の歴史文化の特徴」で明らかとした5つの特徴から、4つのストーリーを導き出す。関連文化財群①（地勢と歴史）「（1）盆地地形と街道・交通に関する歴史文化」と「（2）政治と軍事に関する歴史文化」は、境界の地であるとともに要衝の地であった本町が、更に交流の地へと発展する過程における様々な特徴を示している。本町が持つ最大の特徴であるとともに、現在も感じる雄大な盆地の自然や今につながる人々の営みと密接に関係している。

国見町の歴史文化の特徴
(1) 盆地地形と街道・交通に関する歴史文化
(2) 政治と軍事に関する歴史文化
(3) 農村社会に関する歴史文化
(4) 地質を反映した産業に関する歴史文化
(5) 地域社会と信仰に関する歴史文化

これら歴史文化の特徴から、本町の「地勢と歴史」を特徴付けるストーリーとして、『みちのくの交流のまち国見』を導き出し、43の歴史文化資源を構成資源として結び付け、関連文化財群①とした。

関連文化財群②（風土と生業）「（3）農村社会に関する歴史文化」は、本町の豊かな風土を背景に営まれた農業・生業に関する歴史文化の特徴である。農業は、地質や地形・水利・日照・気候などの農地をとりまく風土により育まれてきた。国見の人々は、用水路を引き、ため池を作るなどかんがい施設を充実させ、水はけのよい丘陵地や砂地には桑や果樹などその場所に適した作物を栽培するなど、風土を尊重しながら自然に働きかけてきた。農作業に関わる信仰や慣習を知恵として持ちながら、長い時間をかけてつくりあげてきた生業であり、多くの関連する歴史文化資源を残している。

これら歴史文化の特徴から、本町の「風土と生業」を特徴付けるストーリーとして、『人々を育み、生活を支えた国見の豊かな風土』を導き出し、19の歴史文化資源を構成資源として結び付け、関連文化財群②とした。

関連文化財群③（資源と産業）「（4）地質を反映した産業に関する歴史文化」は、本町の地質・資源に

表 5-1 ストーリーと主な構成資源の概要

関連文化財群①（地勢と歴史）		
主題／副題	みちのくの交流のまち国見	－阿津賀志山と新旧交通網がもたらした歴史・文化交流－
概要	国見町は古来福島盆地北縁の山並みが障壁となり、境界の地として阿津賀志山防壁に象徴される奥州合戦という時代の転換点となる出来事が刻まれた。また、交通路の整備・物流の発展に伴い、交通の要衝としての側面が高まり、各宿場に繁栄をもたらした。境界の地である国見町は、同時に交流の地として発展してきた。	
主な構成資源	地政学的な特徴と新旧の運輸・交通網がもたらした歴史文化資源	
関連文化財群②（風土と生業）		
主題／副題	人々を育み、生活を支えた国見の豊かな風土	－国見の自然がもたらす恵み－
概要	国見町の豊かな自然を先人達が、その多大な努力により、肥沃な大地へと変え、米・桑・果実などの恵みがもたらされてきた。国見町の豊かな風土が、生活を支え、農作物を実直に育て、寛容で勤勉な人間性を育ててきた。	
主な構成資源	農耕・養蚕を中心とした生業に関連する歴史文化資源	
関連文化財群③（資源と産業）		
主題／副題	太古の大地がもたらした国見の産業史	－窯業・鉱業・国見石の産業－
概要	太古に形成された国見の大地・地質は、後世になって窯業（粘土層）、鉱業（銀鉱脈）、石材産業（凝灰岩）など、様々な産業を興すきっかけとなり、町の発展につながった。	
主な構成資源	本町にもたらされた地下資源とこれを利用した産業に関連する歴史文化資源	
関連文化財群④（信仰）		
主題／副題	地域に根差した村々の祈り	－信仰を中心とした地域文化の伝承－
概要	国見町では、生業である農業・養蚕業に関係する信仰を中心とした地域文化が、時代・世代を越えて現在まで伝承されている。我々がこの国見の風土と密接な関係にある証であり、今なお地域コミュニティの源泉として住民の支え合いを生んでいる。	
主な構成資源	人々の信仰と信仰がもたらした文化に関連する歴史文化資源	

より発展した各種産業に関する歴史文化の特徴である。丘陵地から山々にかけて露出する凝灰岩を石材資源として活用した「国見石」の石材産業、河川により流域に堆積した凝灰岩由来の粘土層を陶土として用いた窯業生産、隣接する半田銀山（桑折町）の関連坑口を持つ本町の鉱業など、地質と関連しながら一時代を築いた産業史は、その面影を伝える歴史文化資源を残している。

これら歴史文化の特徴から、本町の「資源と産業」を特徴付けるストーリーとして、『太古の大地がもたらした国見の産業史』を導き出し、10の歴史文化資源を構成資源として結び付け、関連文化財群③とした。

関連文化財群④（信仰）「(5)地域社会と信仰に関する歴史文化」は、前述の「地勢と歴史」「風土と生業」「資源と産業」に特徴付けられながら営みを続けた人々により、守り伝えられてきた信仰に関する歴史文化の特徴である。江戸時代から続く、16の旧村単位で様々な祭礼が行われており、更に小さなコミュニティによる講や家々の祈りが続けられている。

これら歴史文化の特徴から、本町の「信仰」を特徴付けるストーリーとして、『地域に根差した村々の祈り』を導き出し、33の歴史文化資源を構成資源として結び付け、関連文化財群④とした。

本町の人々は、この地勢・風土とともに歴史を重ね、時代とともに交通や生業を発展させ、多くの困難を祖先や自然を含めた神仏へ祈りを捧げながら乗り越え、歴史文化を生み出してきた。この4つのストーリーが、本町の「国見らしさ」を表徴するものであり、今後守り伝えていくべき関連文化財群である。



図 5-1 関連文化財群を構成する歴史文化資源の分布状況

	(1) 盆地地形と街道・交通に関する歴史文化		(2) 政治と軍事に関する歴史文化		(3) 農村社会に関する歴史文化		(4) 地質を反映した産業に関する歴史文化		(5) 地域社会と信仰に関する歴史文化	
	街道・交通	宿場 (歴史文化・景観)	境界 (政治・支配)	戦跡・城館跡 (戦勝祈願等を含む)	農耕(稲作・畑作・果樹栽培・かんがい)	養蚕	産業	国見石 (石材産業)	信仰	地域社会
縄文					石包丁・蛤刃石斧					
弥生										
古墳			●塚野目第一号墳 ●森山第四号墳							
飛鳥										
奈良			徳江廃寺跡 鹿島神社		山崎条里遺構		●大木戸窯跡			
平安	関連文化財群① (地勢と歴史) みちのくの 交流のまち 国見		下紐の関跡 (石母田弁天神社) 三吉神社	●阿津賀志山防壁 ●藤田城跡 (源宗山) 観音寺 経ヶ岡	関連文化財群② (風土と生業) 人々を育み、 生活を支えた 国見の 豊かな風土		山居製鉄遺跡	関連文化財群③ (資源と産業) 太古の大地が もたらした 国見の産業史	光明寺三合院 (阿弥陀堂)	
鎌倉			福聚寺・ 伊達朝宗夫人墓	●塚野目城跡						
室町			●伊達晴宗判物・ 伊達政宗書状	●石母田城跡	雨乞い				●三合院木造 阿弥陀三尊仏立像	
安土桃山		貝田宿 最禅寺								
江戸	硯石山 (弁慶の硯石・ 踵清水) 義経の腰掛松 ●旧奥州道中 国見峠長坂跡 ●旧羽州街道 小坂峠道跡	藤田宿 だるま市 小坂宿 松蔵寺	徳江小口留番所跡 小坂口留番所跡 貝田口留番所跡		観月台ため池 西根堰 ●旧佐藤家住宅 蔵 (土蔵・石蔵・枋蔵)	養蚕住宅	●半田银山 二階平坑口跡		●阿津賀志三十三 観音八十八大師 画像碑群 観音信仰 (観音霊場) 最禅寺観音堂 観音寺観音堂 西堂業師堂 小牛田山神社 絵馬	観音講 庚申講 二十三夜講
	徳江河岸 ●西大枝深山神社 の廻米絵馬					養蚕絵馬				
近代	芭蕉記念碑 (伊達の太木戸) 旧藤田駅 ●貝田姥神沢 旧鉄道レンガ橋 奥山忠雄家文書	農業市 佐藤家住宅 (佐野屋) 松田家住宅主屋 ●奥山家住宅 主屋・洋館 松田家住宅石蔵		厚樫山古戦将士碑	あんぼ柿・干場 桃 長ごぼう、 長にんじん		国見石(採石場) 石蔵・石造建築物 石工道具 伊藤家住宅石蔵 ●旧小坂村 産業組合石蔵	●内谷春日神社 太々神楽 ●福源寺地藏庵 観音堂 オンメサマ	関連文化財群④ (信仰) 地域に根差した 村々の祈り	おふくでん講 (御福年講)
現代				義経まつり 中尊寺蓮						
その他	大境(御境) 阿津賀志山				●御瀧神社の湧水 さなぶり 種まき桜				●鹿島神社例大祭 水雲神社祭礼 秋葉神社祭礼 蔵島神社祭礼 内谷春日神社祭礼 八幡神社祭礼 滝普請 阿弥陀垂水 小坂子育て地藏 農耕儀礼・信仰 豊蚕信仰	盆欄に供える料理 大千寺念仏講・ 沼供養

※●は指定等の文化財を示す。「その他」は年代が定まらないもの。

図 5-2 国見町の歴史文化の特徴と関連文化財群の構成

関連文化財群①（地勢と歴史）

みちのくの交流のまち国見

—阿津賀志山と新旧交通網がもたらした歴史・文化交流—

対象地域：全域

ストーリーの概要

本町は米沢盆地（日本海側）・仙台平野（太平洋側）・関東平野の三方向へ通じる街道の結節点であり、古来多くの人々や文物が交流する要衝の地であると同時に、福島盆地北縁の山並みが障壁となる境界の地となってきた。

古代、この地は国造制が敷かれた北端部であり、蝦夷勢力と大和朝廷勢力圏の境界ともなった。12世紀末には、奥州合戦最大の激戦である「阿津賀志山の戦い」（文治5〔1189〕年）の舞台となる。奥州藤原氏は事実上この地を支配領域の南端とし、境界となる地峡部の入口にそびえる阿津賀志山から阿武隈川にかけて、鎌倉軍の進軍を遮る阿津賀志山防塁を築いた。この戦いは鎌倉方の勝利を決定付け、源頼朝による全国統一、公家から武家への政権の大転換をもたらした。

その後、この地は約400年間にわたり伊達氏とその家臣により統治され、街道の整備と農村整備が進められた。街道・峠の要所には城館が置かれ、南北朝～戦国期には様々な勢力がせめぎ合いを繰り返す一方、各地の集落に寺院が開かれるなど文化の交流も盛んであった。

江戸時代には、奥州街道・羽州街道と御城米等を江戸まで運んだ阿武隈川舟運の整備がなされ、参勤交代・物資輸送の大動脈へと発達した。藤田・貝田・小坂には宿場が置かれ、定期市でにぎわい、仙台藩との境界地であった貝田・小坂宿は関所としての機能も有した。奥州街道国見峠を通った松尾芭蕉は「伊達の大木戸」と記し、石母田の名松は「義経の腰掛松」として旅の名所となり、人々の往来と文物の交流は飛躍的に広がっていった。

近代以降、鉄道や道路網の整備により交通上の重要度を増すとともに、町並みの近代化が進む。貝田姥神沢旧鉄道レンガ橋などの近代土木技術を用いた構造物が建築され、明治20（1887）年鉄道が敷設された。奥山忠左衛門等の尽力により明治35（1902）年に藤田駅が開業し、金融機関も開業するなど町並みが整備され、商業地へと発達した。昭和30（1955）年代以降は国道及び県道等の新設・改良整備が進み、昭和50（1975）年の東北自動車道と国見インターチェンジの開通により、本町は首都圏と短時間で結ばれ、流通の起点としての役割が増大することとなった。

平成29（2017）年、国道4号沿いに整備された「道の駅国見あつかしの郷」は、まさに現代の宿場としての役割を果たすとともに、本町の交流・連携の拠点として機能する。そして、本町は通過点から目的地への変遷を遂げようとしている。

かつて本町は福島盆地北縁の山並みが障壁となり、阿津賀志山防塁に象徴される奥州合戦をはじめ時代の転換点となる出来事を刻む境界の地となってきた。しかし、人々は交通網を発達させ、多くの文物、あらゆる文化が往来・集散する交流の場へと町を変えてきた。県境に生きる我々の意識の根底に、阿津賀志山とその歴史は深く根付いている。阿津賀志山は、これからも“栄えゆく国を眺める町”の象徴として、多くの来訪者の指標となり、新たな交流を生み出していこう。

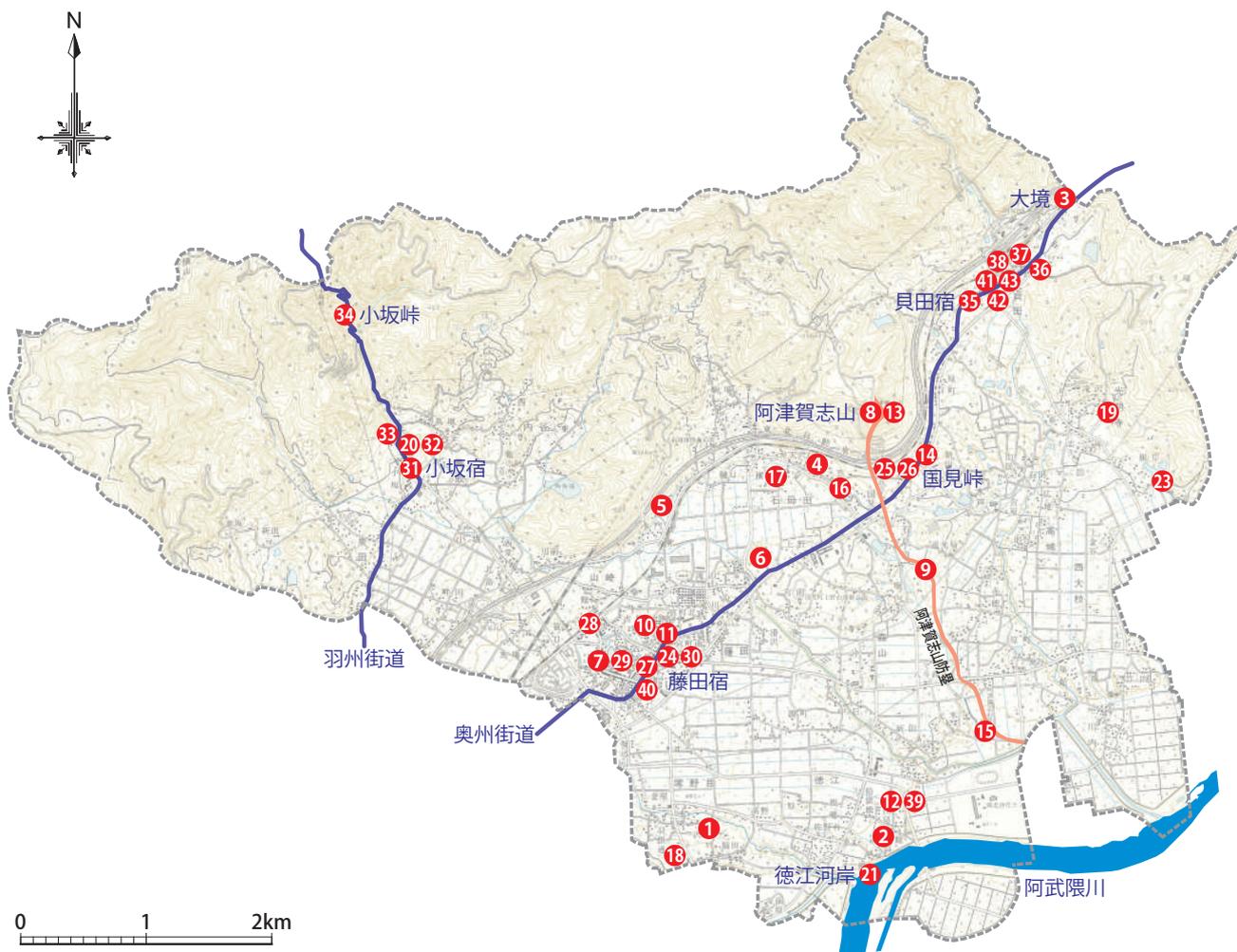


図 5-3 関連文化財群①（地勢と歴史） 構成資源分布図

表 5-2 関連文化財群①（地勢と歴史） 構成資源一覧

No.	資源名	主な年代	No.	資源名	主な年代
1	塚野目第一号墳	古墳	18	塚野目城跡	鎌倉・室町
2	徳江廃寺跡	奈良・平安	19	福聚寺・伊達朝宗夫人墓	鎌倉
3	大境（御境）	—	20	伊達晴宗判物・伊達政宗書状	室町・安土桃山
4	下紐の関跡（石母田弁天神社）	古代	21	徳江河岸	江戸
5	三吉神社	古代	22	徳江小口留番所跡	江戸
6	硯石山（弁慶の硯石・踵清水）	—	23	西大枝深山神社の廻米絵馬	江戸
7	義経まつり	平成	24	藤田宿	江戸
8	阿津賀志山	—	25	旧奥州道中国見峠長坂跡	江戸
9	阿津賀志山防塁	平安	26	芭蕉記念碑（伊達の大木戸）	昭和
10	藤田城跡（源宗山）	平安～室町	27	奥山家住宅主屋・洋館	大正
11	鹿島神社	奈良	28	旧藤田駅	明治
12	観音寺	平安	29	農業市	昭和
13	経ヶ岡	—	30	だるま市	江戸
14	厚樫山故戦将士碑	明治	31	小坂宿	江戸
15	中尊寺蓮	—	32	小坂口留番所跡	江戸
16	義経の腰掛松	江戸	33	松蔵寺	江戸
17	石母田城跡	室町			

※ 「No.」欄を網掛けした資源は所在が広域にわたる、所在地が不明、所蔵が町内に無いなどの理由から地図上に示していない。

No.	資源名	主な年代
34	旧羽州街道小坂峠道跡	江戸
35	貝田宿	安土桃山
36	貝田口留番所跡	江戸
37	最禅寺	安土桃山
38	貝田姥神沢旧鉄道レンガ橋	明治

No.	資源名	主な年代
39	観音寺観音堂汽車絵馬	明治
40	奥山忠雄家文書	大正・昭和
41	佐藤家住宅（佐野屋）	大正
42	松田家住宅主屋	大正
43	松田家住宅石蔵	昭和

関連文化財群①（地勢と歴史） 主な構成資源



① 塚野目第一号墳 つかのめだいいちごうふん 県指定史跡

塚野目第一号墳は、塚野目古墳群の主墳で「八幡塚古墳^{はちまんづかこふん}」とも呼称される。古墳時代中期後半（5世紀中～後葉）に築造された前方後円墳で、主軸長さ72m、後円部直径53m、高さ6mの墳丘には葺石がふかれ、前方部が短い特徴を持つ。周りには幅7～8m、深さ1.5mの溝が巡らされ、多量の円筒埴輪と朝顔形埴輪が出土している。主軸長さ72mは中通り最大の古墳であり、古墳時代中期の古墳としては東北部において抜き出た規模と内容を持つ。古墳時代より経済的基盤を持ち、要衝の地として重要視された場所であることが想定される。



② 徳江廃寺跡 とくえはいじあと

徳江廃寺跡は奈良・平安時代初期の寺院跡で、重弁蓮華文軒丸瓦^{じゅうべんれんげもんのかまがわら}・旋回花文軒丸瓦^{せんかいかもんのかまがわら}・蓮華文軒丸瓦^{れんげもんのかまがわら}などが出土する。

重弁蓮華文軒丸瓦は多賀城（宮城県多賀城市）Ⅱ期の瓦、旋回花文軒丸瓦は腰浜廃寺跡（福島市）から出土した瓦と同じ形式のものである。蓮華文軒丸瓦は西原廃寺跡（福島市）、山居遺跡、正玄堂遺跡（いずれも本町内）から出土している。

伊達郡の郡制施行以前に国府と関連を持ちながら建設された後、郡衙に伴う郡寺の性格を持つようになったと推定されている。平安時代末期の火災によって焼失するまで存在した形跡がある。



③ 大境（御境） おおざかい おさかい

本町の北に接する宮城県白石市越河との県境には、両県にわたり伸びる断層帯により造り出された切通状の谷底平地が通り、この細い谷を古代の東山道^{とうざんどう}・中世の奥大道^{おくだいどう}・近世の奥州街道と各時代の幹線道路が峠道（大境又は御境）とした。現在も、大動脈国道4号・東北自動車道・JR東北本線の全てが通過する要所となっている。

旧仙台領の地誌である『奥州仙台領遠見記』（宝暦11〔1761〕年）では、「伊達郡貝田村御境江戸への往還なり」と記され、幕府領と仙台藩領の境目の様子を伝えている。



④ 下紐の関跡（石母田弁天神社） したひも せきあと いしも だべんてんじんじゃ

古代の東山道には阿津賀志山を横断する、蝦夷勢力と大和朝廷勢力圏の境界として下紐の関が置かれていたといわれ、阿津賀志山の南麓、石母田字弁天沢にある弁天神社はその伝承地の一つである。この関にまつわる伝えとして、「用明天皇が蝦夷征伐に下向された時、伴われた妃の玉世姫がこの地で産気づかれ下紐を解き皇子を産み落とされた」などの話が残されている。「下紐」とは万葉集などの恋歌に多く現れ、「固く結ぶ」にかかる言葉で、この関の守りの固さにみわたたものと解される。

関連文化財群①（地勢と歴史） 主な構成資源



⑤ 三吉神社

石母田字大清水に所在する三吉神社は里宮で、湧き出した清水（霊水）の恩恵に感謝し、水神を祀ったのが創始であると伝わる。奥宮は石母田字西畑地内に石祠があり、弥都波能売神や三吉大神、坂上田村麻呂を祭神とし、古代蝦夷との合戦のために北上した將軍たちが、蝦夷の領域に足を踏み入れる前にこの地で勧請あるいは戦勝祈願したとの由緒を持つ。明治時代初期に秋田の太平三吉神社よりあらためて分霊した。武神、水神、作神として、また火難除け、安全、安産、合格祈願などの篤い信仰を得ている。



⑥ 硯石山（弁慶の硯石・踵清水）

硯石山は国見石を主体とする独立丘陵で、義経・弁慶主従にまつわる伝説が残る。

頂部にある弁慶の硯石は、義経が軍勢を集めた際、弁慶が山の頂上にある硯の形に凹む石で墨をすり、集まった軍兵の名簿を記したと伝わり、100日の早ばつでも枯れない水を湛えるという。麓の踵清水は、弁慶が足を強く踏んだところ、清水が湧き出したという伝説がある。

慶応4（1868）年の戊辰戦争の際、仙台藩の命令で近辺の農民が動員され、砲台場を築いた戦跡でもある。



⑦ 義経まつり

平成元（1989）年に実施した「あつかし山奥州合戦 800 年祭」の記念事業として「義経まつり武者行列」が始まった。その後、「義経まつり」は、平成8（1996）年度から3年間、「商工振興活性化事業」として県と町の補助を受けて実施し、以後、町のイベントとして定着している。東日本大震災の影響により、一時従来どおりの開催ができなくなったが、第18回（平成25〔2013〕年度）からは、「復興・絆」くにみの日事業として、町民の「心の元気」を取り戻す事業として毎年開催されている。



⑧ 阿津賀志山

阿津賀志山（厚樫山）は、福島県と宮城県の間境に位置する標高289 mの山であり、見る方向により山容が変化する特徴から「タンガラ山」「丸山」などの別名を持つ。古代から信仰の対象であったことをうかがわせる「経塚山」の名も残る。福島盆地を一望できる山頂の眺めから「国見山」とも呼称され、現在の町名にも関連している。

町民は阿津賀志山のある景観に親しみ、町のシンボルとなっている。



⑨ 阿津賀志山防塁

国指定史跡

文治5（1189）年奥州合戦において、奥州藤原氏が事実上支配領域の南端と意識し、北上する源頼朝率いる鎌倉軍を迎え討つために築いた二重の堀と三重の土塁からなる要塞施設である。両軍数万の軍勢による阿津賀志山の合戦は奥州合戦の大勢を決したことから、平泉政権の終焉と鎌倉幕府による武士政権確立を示す重要な史跡である。

当時の基幹交通路である奥大道（陸上交通）と阿武隈川（河川交通）の両方を強く意識して築かれており、交通路を遮断し要塞を構える当時の戦術を現在に伝える唯一最大の遺跡である。

関連文化財群①（地勢と歴史） 主な構成資源



ふじたじょうあと げんぞうやま
⑩ 藤田城跡（源宗山） 町指定史跡

源宗山は、旧奥州街道藤田宿の背後に位置する独立丘陵である。文治5（1189）年阿津賀志山の戦いにおいて、鎌倉方の軍勢が藤田宿に到着した際に、源頼朝が本陣を置いたと伝わり、「源氏の宗家がよった山」に由来する地名といわれている。南北朝時代には南朝方の伊達行宗（第7代）配下の藤田城として、靈山城とともに南北朝争乱の舞台となり、貞和3（1347）年に北朝軍の総攻撃によって落城した。



かしまじんじや
⑪ 鹿島神社

鹿島神社（藤田字北）は旧奥州街道藤田宿に所在する。8世紀頃に現在より300mほど北に創建されたと伝わるが、享保10（1725）年に現在の地に遷座し、医薬神社（江戸時代には「明けの薬師」と呼ばれた）とともに祀られた。現在の社殿は明治14（1881）年、街道沿いの石垣と一緒に改修された。三吉神社同様、古代蝦夷との合戦に向かう將軍達が勧請した伝説や、源頼朝の戦勝祈願、藤田地名の縁起の伝説などが残されている。



かんのんじ
⑫ 観音寺

観音寺は徳江字中ノ内に所在する真言宗寺院である。寺の縁起によると、天長3（826）年に空海が開基したと伝わり、文治5（1189）年阿津賀志山の戦いに関する伝承が残る。「烏帽子に白鳥を置いた徳江観音の社人が頼朝方の三浦義村を案内し頼朝方を勝利に導いたため、三百貫文の社寺地を寄進された」（『徳江観音寺縁起』、慶長7〔1962〕年）境内には享保3（1718）年建築の観音堂・鐘樓が建ち、伊達秩父準三十四観音の第30番札所として信仰を集める。



きょう おか
⑬ 経ヶ岡

『吾妻鏡』より、経ヶ岡は文治5（1189）年石那坂の合戦で敗死した佐藤基治一族の首級をさらした場所とされる。現在、阿津賀志山の東麓、旧奥州街道国見峠周辺に経ヶ岡の地名が残されており、近くに阿津賀志山三十三観音八十八大師画像碑群、厚樫山故戦将士碑などが建てられている。地名から経塚が営まれた可能性も指摘されている。



あつかしやま こせんしょうしひ
⑭ 厚樫山故戦将士碑

厚樫山故戦将士碑は、明治18（1885）年に信夫・伊達両郡を直轄した信夫郡長・柴山景綱及び信夫郡書記・徳江末晴、藤田村ほか八か村戸長・成沢英和、大木戸村豪農・半澤与一郎らの地元有志により建立されたものである。文治5（1189）年阿津賀志山の合戦から700年を記念し、戦没した鎌倉・奥州両軍将士への鎮魂、『吾妻鏡』によった阿津賀志山の合戦の経緯、遺跡の保護について記している。碑文は柴山景綱の撰、書並びに篆額は逐堂高橋周によるものである。

関連文化財群①（地勢と歴史） 主な構成資源



ちゅうぞんじはす
15 中尊寺蓮

平泉中尊寺・金色堂に伝わる藤原泰衡（第4代当主）の首桶に納められていた蓮の種から開花したもので「中尊寺蓮」と呼ばれる。

本町には、奥州藤原氏が築いた国指定史跡「阿津賀志山防塁」があり、平泉とゆかりのある町として平成21（2009）年4月に中尊寺から株を譲り受け、地域の方々により大切に栽培されている。

7月中旬～8月が見頃で、濃い緑の中に鮮やかなピンクの花がいくつも見られる。



よしつね こしかけまつ
16 義経の腰掛松

「義経の腰掛松」の名称は、平治の乱（1159）の後、牛若丸（源義経）が、奥州の商人金売り吉次に伴われて平泉の藤原秀衡をたよって東下りをした折、路傍の幼松に腰をかけて一休みした故事に由来する。江戸時代中期頃より、奥州街道の名所として知られるようになり、数々の紀行文等に取り上げられた。

現在の松は枯死した2代目松の接木により育成した3代目となる。傍には寛政12（1800）年10月に桑折代官の岸本彌三郎（源一成）によって撰文された「義経腰掛の松」の石碑が建てられている。



いしもだじょうあと
17 石母田城跡

町指定史跡

石母田城跡は伊達氏譜代の家臣・石母田氏の拠った本郭・二ノ郭・三ノ郭からなる複郭式の平城である。内堀・丸堀・外堀と呼ばれる水濠が巡らされ、侍屋敷を内包する総構えの城郭の特徴を持つ。

戦国期の伊達氏内乱時にはしばしば主君を迎える城館となっている。天正18（1590）年の奥羽仕置により廃城となった。

城跡の各所に土塁や水堀が遺され、往時の城郭景観を留めており、本町における典型的な中世の城館跡とされる。



つかのめじょうあと
18 塚野目城跡

町指定史跡

塚野目城跡は阿武隈川と普蔵川、矢ノ目川の間舌状台地上に立地する。東西にやや長い略長方形の単濠単郭式の平城である。

塚野目城の沿革は明確ではないが、南北朝時代の城主は北畠親房の子息・正教であったとの伝承が残り、霊山とともに戦乱があったと伝わる。

町内の城館の中では保存状況が良好で、「おしのさん」に代表される雨乞い伝説の舞台として地域に語り継がれる存在である。



ふくじゆじ だてともむねふじんはか
19 福聚寺・伊達朝宗夫人墓

光明寺字沼に所在する福聚寺には、文治5（1189）年阿津賀志山の合戦の功績により、伊達郡を与えられた伊達氏初代当主朝宗の夫人の墓が建立されている。周辺は、夫人の菩提寺として存在した光明寺（伊達五山の一つ）を中心に整備され、伊達氏の庇護を受けて栄えた。

現在の五輪塔は文政4（1821）年に仙台藩によって再建されたもので、赤瀧石の囲いの中に、再建前の五輪塔の一部と、伊達氏の家紋である縦三ツ引の明り窓のある萬年塔とともに保存されている。

関連文化財群①（地勢と歴史） 主な構成資源



だて はるむねはんもつ だてまさむねしよじょう
 ⑳ 伊達晴宗判物・伊達政宗書状 町指定有形文化財

伊達晴宗判物・伊達政宗書状は、羽州街道小坂宿の旧口留番所富塚家に伝わるもので、町内唯一の中世文書である。

晴宗判物は天文 18（1550）年に富塚家の所領を没収して、小梁川大炊に与えた所領の宛行状、政宗書状は天正 15（1587）年に伊達成実に宛てたもので、いずれも戦国期における伊達氏の動向を伝える貴重な史料である。



とくえ かし
 ㉑ 徳江河岸

寛文 4（1664）年、上杉藩の半知削封により本町が幕府領となった以降、国見一带の年貢米は「御城米」と呼ばれ、江戸に廻米されるようになった。幕府は江戸の豪商・渡辺友以、河村瑞賢等に廻米を請け負わせ、阿武隈川によって河口の荒浜港（現：宮城県亘理町）まで運ぶ必要性から、危険な峡谷部などの難所について川除普請を行い、運航の安全を図るとともに、沿岸各地に津出しを行う河岸を設置した。河岸は明治時代の鉄道輸送開始とともに使命を終え、跡地は阿武隈川の流路が当時より北へ寄ったため河道となっている。

写真：阿武隈川舟運図 ※福島市資料展示室所蔵



とくえ こくちどめぼんしよあと
 ㉒ 徳江小口留番所跡

江戸時代、阿武隈川には御城米の津出しが行われた徳江河岸や、対岸の梁川・保原などの村々への渡船場があり、川舟を利用した商業荷物の移送が多かった。これらの留物の監視にあたるため、徳江には小口留番所が設置された。創設時期は明確ではないが、幕末期に及んでいる。番所役には徳江字佐野台の実沢家が当たった。



にしおおえだしんざんじんじや かいまい え ま
 ㉓ 西大枝深山神社の廻米絵馬 町指定有形民俗文化財

上杉藩の削封で国見が幕府領となった寛文 4（1664）年以降、年貢米（御城米）は阿武隈川の舟運によって河口の荒浜港（現：宮城県亘理町）へ運ばれ、海船に積み替えて江戸へ廻送された。

当該絵馬は、幕末期の西大枝の名主・佐藤浅次郎が、荒浜港に出役して、御城米の積替え作業の監督にあたった際の光景を、同村の画家・佐州（佐藤名平）に描かせ、村の鎮守である深山神社（西大枝字宮ノ内）に奉納させたものである。江戸時代の阿武隈川舟運の状況について知る上で数少ない貴重な史料である。



ふじたじゆく
 ㉔ 藤田宿

藤田宿は『吾妻鏡』の文治 5（1189）年 8 月 10 日の条に、源頼朝が阿津賀志山の戦いに本営を置いたとするのが初見である。

近世には奥州街道の宿場としての整備が進められ、諸大名の参勤交代や商人・旅人でにぎわいをみせた。半田銀山採掘の本格化、養蚕業の隆盛に伴い、隣接する桑折宿が郡内の中心的役割を担うと、藤田宿は周辺の農村集落の中心として物産が集散する在郷町として発達した。一と六の付く日には六斎市が立ち、農業・養蚕業の生産物を交換する場所として農村集落との関係を強めた。

関連文化財群①（地勢と歴史） 主な構成資源



きゅうおうしゅうどうちゅうくにみとうげながさかあと
25 旧奥州道中国見峠長坂跡 町指定史跡

奥州街道の険阻な山坂として著名な国見峠は、軍事・交通上の要衝に位置する。

近世には仙台・一関・盛岡・八戸・松前藩の諸侯が、参勤交代に通った道であり、松尾芭蕉も『おくのほそ道』で「路縦横に踏んで、伊達の大木戸を越す」と旅の辛さを記している。

戊辰戦争の際には軍事道路として重要な役割を果たしたが、明治10（1877）年代になると急な坂道が馬車の通行に適さなくなり、山麓に新道が開かれるとともに、峠越えの街道が廃されて使命を終えた。



ばしゅうきねんひ だて おおきど
26 芭蕉記念碑（伊達の大木戸）

松尾芭蕉は元禄2（1689）年旧暦の3月に弟子の曾良を伴い、『おくのほそ道』の旅に出る。同年4月20日に白河の関より福島域に入り、本町には5月3日に到着した。

碑文にある「路縦横に踏んで、伊達の大木戸を越す」の一節は奥州街道最大の難所として知られた国見峠の急な長坂の経験から記した物であろう。峠には茶屋が2軒あったといわれ、その近くには昭和43（1968）年に建立された芭蕉の記念碑が立つ。



おくやまけじゅうたくしゅおく ようかん
27 奥山家住宅主屋・洋館 国登録有形文化財

奥山家は天保年間（1830～1844）に藤田宿で穀屋・呉服屋として伸長し、明治時代から昭和時代初期にかけて金融業・不動産業等の事業で大成した。3代目・忠左衛門は、政治家・事業家として、本町及び伊達郡の近代化に大きな役割を果たした。

奥山家住宅は同家の迎賓館として、大正10（1921）年に設計・大内官平（福島市大内設計）、棟梁・阿部佐七により建築された。純和風の主屋とルネサンス様式をベースとした洋館からなり、奥山家の功績を伝える場所となっている。



きゅうふじたえき
28 旧藤田駅

現 JR 東北本線の前身となる日本鉄道会社の奥州線は明治24（1891）年に上野―青森間が全通、明治42（1909）年国有化に伴い現在の東北本線の名称が用いられた。

藤田駅は日本鉄道会社の時代、明治33（1900）年開業で、当時は貨物取扱駅であったとされる。近年まで昭和9（1934）年建築の木造平屋建の駅舎が使用されていたが、老朽化に伴い新駅舎への建替えが行われた（平成31〔2019〕年）。



のうぎょういち
29 農業市

農業市は毎年5月5日、観月台ため池周辺を会場として開催される。本町商工会主催で昭和33（1958）年から続くもので、近隣市町村から多くの人で終日にぎわい、町の年中行事として定着している。会場では、植木・盆栽・青果物・苗木・農業用具・日用品などが販売され、定期市（六斎市）の名残を垣間見ることができる。

農業市の起源は明らかではないが、江戸時代に現在の福島市宮代の山王社で行われた「農市」が各地に広まったという伝承があり、以前は神社や寺院で行われたことが推測される。

関連文化財群①（地勢と歴史） 主な構成資源

③① だるま市 いち

旧藤田宿の街道沿いでは、年末恒例の行事として「だるま市」が開催される。正月のお供え物や縁起物のだるまが市に並び、それらを買求める多くの人々にぎわう。

だるま市は江戸時代の「六斎市」に起源を持ち、後に12月29日に歳の市として現在まで続いてきたと推測される。

市では大小様々なだるまが売られ、毎年大きめのだるまに買い替えていく風習が残されている。年明け1月7日には鹿島神社境内でどんど焼きが行われ、古いだるまはここで丁寧に供養される。

③① 小坂宿 こさかじゆく

小坂宿は小坂峠の入口にあって、羽州街道最初の宿駅である。

羽州街道を挟み、両側に50軒前後短冊状の屋敷割が行われ、北が高く、南が低い地形から屋敷地は階段状に造成されている。

宿南端にはかつて一里塚が築かれたが、現存しない。宿北端の高台には松蔵寺と村の鎮守・稲荷神社が祀られており、高台の手前を東へ桁形に折れた所には、口留番所の木戸が構えられていた。

③② 小坂口留番所跡 こさかくちどめばんしよあと

小坂宿は近世において、小坂峠の登り口・羽州街道最初の宿駅として栄えた。寛永15(1640)年に上杉藩が街道警護(特に仙台領との国境)を行う番所として、原七右衛門を守役とする小坂口留番所を設置した。当地が幕府領となった寛文4(1664)年以降、口留番所の役人は二人扶持を給され、留物の領外持ち出し、不審な女や手負者、物品や馬等の監視取締りにあたった。

番所は小坂宿を貫通する街道を北へ直進し、松蔵寺の手前を東に曲がったところにあり、木戸が構えられたとされる。

写真：小坂村絵図(「小坂区有文書」より) ※福島県歴史資料館寄託

③③ 松蔵寺 しょうぞうじ

松蔵寺(小坂字上泉川)は旧羽州街道小坂宿に所在する曹洞宗寺院で、宿の北端において町並みを見下ろす高台に所在する。

本堂は棟札から昭和43(1968)年の建築とされる。本堂西側には昭和13(1938)年に改築を受けた三間四方の観音堂(写真)が所在し、信達三十三観音の第20番札所として信仰を集めた。

境内西側に位置する稲荷神社とあわせ、旧小坂宿の景観形成に大きく寄与している。

③④ 旧羽州街道小坂峠道跡 きゆうしゅうしゅうかいどうこさかとうげみちあと

町指定史跡

羽州街道随一の難所といわれた小坂峠は、本町と宮城県白石市との境に位置し、南北朝争乱期以降は伊達郡と出羽国置賜地方を結ぶ、伊達氏にとっての軍事・経済上の重要な街道であった。

小坂峠道は、お産の苦しみにほどに辛いことから「産坂」の異名もある。つづら折りの急傾斜の坂道は、近世において出羽国諸大名の参勤交代や御城米の輸送等に利用された。旧道東側には慶応2(1866)年に開削した新道(慶応新道)があるが、現在の峠越えの道路は昭和47(1972)年に完成した主要地方道白石国見線である。

関連文化財群①（地勢と歴史） 主な構成資源



かいだじゆく
35 貝田宿

貝田宿は奥州街道の宿駅である。天正年間（1573～1591）伊達政宗によって開かれたと伝わり、本格的な整備をみるのは参勤交代や伝馬制度の充実をみた上杉藩領の時代であったとされる。

町は街道を挟んで両側に短冊形の屋敷割が行われており、町頭と町尻の比高差が大きく、屋敷地は石垣で階段状に区分される。

行楽や社寺参り等、長旅の宿泊地、商品荷物の継立場としてにぎわい、旅籠屋（角屋・吉野家）、銭湯屋、納豆屋など、現在も宿町時代の屋号を持つ家が多く残されている。



かいだくちどめぼんしよあと
36 貝田口留番所跡

奥州街道の貝田宿は、奥羽の大藩である仙台藩領と境を接しており、軍事・交通上の要衝の地に立地したため、口留番所が置かれていた。

貝田口留番所が設置された年代は明らかではないが、江戸時代初期、上杉支配下の時期には家中の侍が番士の任に着き、幕府領となった寛文4（1664）年以降は岡田家が世襲ご番所役を務めた。

口留番所役の職務としては、領内の産物が他領に流出することの監視や、旅人の監視取締があった。



さいぜんじ
37 最禅寺

最禅寺（貝田字寺脇）は旧奥州街道貝田宿治いに所在する、天正16（1588）年又は寛永3（1626）年の開山と伝わる曹洞宗寺院である。

本堂は桁行7間半・梁間6間、寄棟造の建物で、明和2（1765）年建築と伝わり、貝田地区で現存する最古の建造物である。

旧奥州街道が大きくカーブする町尻に位置し、旧口留番所の近隣に位置する当該寺院は、旧貝田宿の町並み景観に大きく寄与する建物である。



かいだうぼがみざわきゆうてつどう
38 貝田姥神沢旧鉄道レンガ橋

町指定有形文化財

牛沢川（貝田付近の上流部では「姥神沢」と呼ばれる）に架かる貝田姥神沢旧鉄道レンガ橋は、明治20（1887）年の黒磯一塩釜間開業当初の旧鉄道橋で、大正9（1920）年まで使用されていた。

橋の構造はレンガ積アーチ構造で、長さ7.7m、幅10.4m、高さ5.8mを測り、町並みに近接して鉄道が往来していた当時の様子を伝えている。

現在は町道となっている当時の鉄道路線跡とともに明治時代の鉄道遺産である。



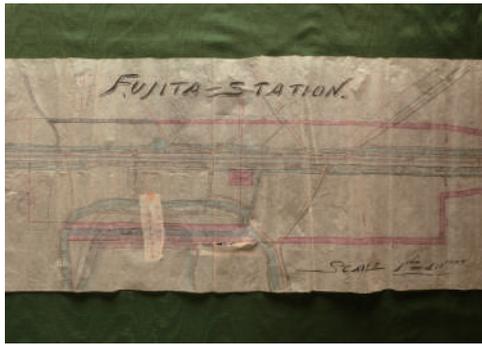
かんのんじ かんのだう きしやえ ま
39 観音寺観音堂汽車絵馬

町指定有形民俗文化財

明治20（1887）年、本町に鉄道（現：JR東北本線）が敷設され、近代化を象徴する蒸気機関車が往来することとなった。観音寺観音堂には、徳江字団扇の徳江タケが明治25（1892）年に汽車の図柄に刺繍を施した絵馬が奉納されている。

この鉄道は当初、福島以北の地域は阿武隈川沿いに、保原・梁川から宮城県へ向かう計画になっていたが、当時養蚕業の本場であったこの地域の人たちが汽車の煙で桑の葉が黒くなることを嫌って反対し、桑折・藤田・白石を経由する旧奥州街道沿いに変更されたという。

関連文化財群①（地勢と歴史） 主な構成資源



おくやまただ お け もんじよ
 40 奥山忠雄家文書

旧藤田町の奥山家は、伊達地方有数の商家・名望家であった。明治・大正期の『伊達郡統計書』にも奥山合名会社の名称で常に有力者として登場し、特に3代目・忠左衛門（1859～1928）は藤田駅や第七百七銀行の誘致に尽力するなど本町の近代化に貢献した。

奥山家には、藤田駅誘致にかかる関係資料や奥山合名会社経営に関する資料、また大正～昭和初期頃の町政及び町内会、戦中の軍への倉庫提供等の関係資料等が保存されている。（左写真は藤田駅設計図、明治30〔1897〕年）



さとうけじゆうたく さの や
 41 佐藤家住宅（佐野屋）

佐藤家住宅は、旧貝田宿の中央に位置し、「佐野屋」の屋号を持つ。江戸時代には旅籠を営み、隣接する「得利屋」が脇本陣、佐野屋は本陣であったと伝わる。

主屋は大正15（1926）年に宮城県白石市越河五賀より移築された養蚕住宅である。屋根は妻面に窓が作られた入母屋造とし、養蚕に必要な広い作業空間と採光を確保した屋根裏を有する。屋内には床下に火鉢を設置し、屋根の棟には気抜きとともに、温室飼育のための装置が備えられている。



まつだけじゆうたくしゅおく
 42 松田家住宅主屋

松田家住宅主屋は旧貝田宿に所在する、大正4（1909）年に建築された木造二階建の養蚕住宅である。旧住宅が明治時代に焼失したため、伊達市梁川町粟野から移築したものと伝わる。

屋根は入母屋造瓦葺で、大棟には気抜きが造り付けられている。また、壁は軒裏まで丁寧に塗り込まれた大壁造となっている。一部の壁は漆喰塗り、二階部分には鉄板雨戸が取り付けられ、防火の機能を持つ屋敷林とともに、隣接地からの延焼を防ぐ工夫がされている。



まつだけじゆうたくいしぐら
 43 松田家住宅石蔵

松田家住宅石蔵は旧貝田宿に所在し、昭和6（1931）年に主屋とともに建築された。国見石を用いた蔵で、街道に面する石蔵と味噌蔵の2棟が現存する。

石造二階建の蔵は、重厚な鉄扉が耐火性に優れる国見石とともに防火の機能を持ち、壁面の手彫りによるツルメ掘仕上げと、寄棟造の屋根が特徴である。

石造平屋建の味噌蔵は、小規模ながら正面にアーチ形のレリーフを持ち、内部はヴォールト天井が架けられている。

関連文化財群②（風土と生業）

人々を育み、生活を支えた国見の豊かな風土

—国見の自然がもたらす恵み—

対象地域：全域

ストーリーの概要

奥羽山脈と阿武隈山地に挟まれた福島盆地特有の気候をもつ本町は、気温の日較差・年較差が大きく、比較的雨量も少ない特徴をもつ。また、町面積のおよそ三分の二を占める丘陵地から平野部には、南を流れる阿武隈川に向けて山間からいくつもの小河川が小さな谷を刻む。平野部は凝灰岩質由来の粘土層が広く分布し、阿武隈川沿岸には水はけの良い土壌が存在する。

こうした国見の気候・地形・地質が、現在の基幹産業である農業の高い生産性と品質につながり、様々な恵みをもたらしている。しかし、この風土を肥沃な大地に変え、現在の国見の農業に発展させたものは、先人達の多大な努力であり、その営みを反映した様々な歴史文化資源と周辺の田畑・里山を含めた景観により本町固有の文化的景観が形成されてきた。

本町の農業は沢水・湧水を用いて始まったと考えられ、御瀧神社の豊富な湧水は太古から光明寺集落の人々を支え、現在も流域の農地へ供給されている。古代には、県内有数の古墳群を造営する稲作集団が現れ、8世紀頃には、平野部において条里制による開田が進められた。

このように、豊かな水資源を持ち、古くから稲作による農業が行われてきた本町では、かんがい施設の整備による農地の拡大が進められる。12世紀末に伊達氏が入部すると、一族・家臣団による農村支配のもと、水路やため池などの整備が進められた。江戸時代に入り、上杉藩領時代には、摺上川（福島市）から取水する大規模な農業用水路である西根堰が開削され、多くの土地に水が供給されることにより開田が進み、飛躍的に農業生産力が高まった。その後は主に幕府の直轄領となり、国見の米は幕府領の年貢である御城米として、阿武隈川の舟運をへて江戸へと廻漕され、幕府財政を支えた。

また、丘陵地や、小河川の河原地を農地に変える養蚕奨励策も進められた。特に阿武隈川氾濫原の水はけの良い砂質土壌が桑栽培に適したことから、養蚕業は拡大し興盛した。宝暦～天明年間（1751～1789）には伊達地方の蚕種生産は関東先進地を超えるまでになり、優良蚕種の販路は関東にまで拡大した。安永年間（1772～1781）には産地偽装の不良蚕種流通の防止策として、伊達地方の39か村（本町では川内村、徳江村が含まれる）が幕府より「奥州蚕種本場^{おうしゅうさんたねほんば}」の称号を得た。これはひとえに良桑の育成、蚕種の改良、養蚕技術の向上など、先人のたゆまぬ努力の賜物である。

明治時代以降も基幹産業である水稲栽培と養蚕・蚕種業は継続されたが、生糸価格の乱高下が繰り返され次第に養蚕業からの転換が図られるようになる。様々な試みの中で、町民は丘陵地や平野部の桑畑を果樹園（りんご・桃・柿）に、阿武隈川沿岸を野菜畑へと転換させた。寒暖差の大きい気候は果樹栽培に適し、やわらかく肥沃な土壌は栄養豊富な根菜類の源となった。また風通しが良く広い養蚕住宅は、あんぼ柿製造に活用された。

本町域に暮らす人々は、古くから農業・養蚕業を生業とし、自然とともに暮らし、他方で克服しながら、その恵みを楽しんできた。全国に誇る本町の農産物の品質の良さは、自然条件のみならず、代々この土地を愛し、この土地に暮らし、努力を惜しまず、実直に農業と向き合う人々の手により生み出されたものである。

国見の豊かな風土は、人々の生業と生活を支え、寛容で勤勉な人間性を育んできた。国見の人々は、いつの時代も、変化する社会環境と真摯に向き合いながら、豊かな故郷を育んでいく。



図 5-4 関連文化財群②（風土と生業） 構成資源分布図

表 5-3 関連文化財群②（風土と生業） 構成資源一覧

No.	資源名	主な年代	No.	資源名	主な年代
1	石包丁・蛤刃石斧	弥生	11	徳江河岸	江戸
2	山崎条里遺構	奈良	12	西大枝深山神社の廻米絵馬	江戸
3	森山第四号墳	古墳	13	養蚕絵馬	江戸・明治
4	御瀧神社の湧水	—	14	養蚕住宅	江戸～昭和
5	観月台ため池	江戸	15	旧佐藤家住宅	江戸
6	西根堰	江戸	16	蔵（土蔵・石蔵・靱蔵）	江戸～昭和
7	雨乞い	—	17	あんぼ柿・干場	昭和
8	種まき桜	—	18	桃	昭和
9	さなぶり	—	19	長ごぼう、長にんじん	昭和
10	農業市	昭和			

※ 「No.」欄を網掛けした資源は所在が広域にわたる、所在地が不明、所蔵が町内に無いなどの理由から地図上に示していない。

関連文化財群②（風土と生業） 主な構成資源



いしぼうちょう はまぐりばせきふ
① 石包丁・蛤刃石斧

本町における弥生時代の遺跡は不明瞭なものが多いが、ぶつくでん 仏供田遺跡（徳江）、堰下遺跡（泉田）、割田遺跡（石母田）、山田遺跡（光明寺）などから石包丁や蛤刃石斧が出土している。

その後、鉄器文化が徐々に地方へ伝わることに伴い、農作業の効率化が向上し、現在の稲作農業の第一歩を踏み出したと推察できる。



やまざきじょうりいこう
② 山崎条里遺構

本町では8世紀頃に古代律令国家の土地制度と深い関係を持つ条里制による開田が徳江・塚野目などの平野部で進められた。伊達郡西部地域（国見町・桑折町及び伊達市・福島市の一部）には、東北地方でも有数の規模を持つ条里制遺構が存在したが、昭和50（1975）年代のは場整備でほとんどが姿を消している。

山崎条里遺構はこの事業の対象地外にあったことから、条里制の地割景観が良く残されている。

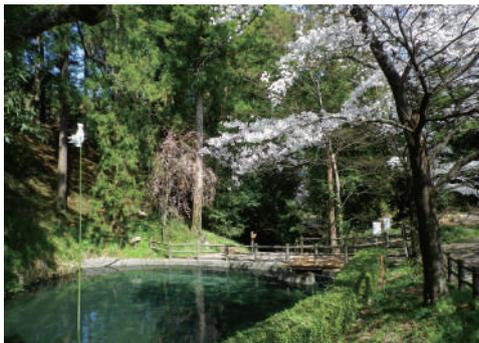


もりやまだいよんごうふん
③ 森山第四号墳

町指定史跡

森山の条里水田遺構を見下ろす森山丘陵（上野原）の南斜面に、円墳4基からなる森山古墳群があり、このうち、第四号墳は町の指定史跡となっている。

森山古墳群の小規模円墳群は古墳時代後期のもので、地方の官吏や有力農民の家族墓的な性格を持つものとされる。本町域において農民の階層分化が進み、円墳の被葬者となるような有力農民の出現を物語るものである。昭和49（1974）年、古墳内部見学のため覆屋を設置して便宜を図っている。



おんたきじんじや ゆうすい
④ 御瀧神社の湧水

町指定天然記念物

御瀧神社境内に湧き出る水は四季を通して水量が豊富で、地域の生活用水や水田のかんがい用水として広く利用されている。

御瀧神社が所在する光明寺集落はこの湧水を中心に集落が形成されており、南には牛沢川による扇状地が続き、古くから湧水を利用した水田地帯が広がっている。

湧水池と水路は住民の共同作業により日常的な維持・管理が行われ清潔に保たれている。



かんげつだい いけ
⑤ 観月台ため池

観月台ため池は、天保年間（1831～1845）の「藤田村絵図」に描かれており、藤田宿及びその周辺の農業用水路への供給源となっていた。また、明治時代初期の絵図では4つのため池が確認できる。

昭和35（1960）～44（1969）年の県営かんがい排水事業で上流に農業用ダム建設及び用水路の改修が行われ、かんがい用水貯留から水量調整用ため池へとその性格を変えている。

ため池周辺は、明治時代以降、旅館やカフェでにぎわい、大正時代には桜・松が植えられ、現在は5月の農業市や8月の盆踊りが開かれるなど住民の憩いの場となっている。

関連文化財群②（風土と生業） 主な構成資源

⑥ 西根堰にしねぜき

西根堰は寛永10（1633）年に完成した全長約28kmの農業用水路である。標高差僅か50mという高い土木水準で設計され、福島市（飯坂）・桑折町・国見町を経て伊達市五十沢に至り、当時の29か村水田900町歩を潤した。西根堰の完成により、既往のかんがい水が達せず荒廃していた下流地の水田が復旧され、西根堰に置き換えられたかんがい水を上流地で使用することで開田も進められた。

西根堰は現在も一帯の稲作を支えている現役の施設であり、平成22（2010）年度には、土木学会選奨土木遺産に認定された。

⑦ 雨乞いあまご

本町の農業は用水の確保・供給が深刻な課題であった。古くは河川・湧水・ため池等で用水を確保・供給し、近世になると西根堰の整備に至るが、それでも干ばつに瀕することもあり、住民は信仰の力「雨乞い」に頼ったと考えられる。

八幡神社（塚野目）・貴船神社（泉田）・愛宕神社・滝口神社（いずれも石母田・国見神社境内）・雷神社（小坂・徳江）・水雲神社（貝田・山崎）などの神社に雨乞いの記録や伝承があり、「おしのさん」や「雷神様」に代表される雨乞いの民話も細かい内容の差異はあるが数多く残されている。

⑧ 種まき桜たねまきざくら

かつて町内には種まき桜と呼ばれる桜の大樹が点在していた。

つばみが色づくときと籾をまくなど、農事暦・自然暦の目安として、田畑の仕事をを行う時期に用いられてきた。

現在確認されるものは、貝田字杉ノ内のエドヒガン系の大木で、濃い花弁の色が長く楽しめる一本桜や、大木戸字宮原及び長泉寺（山崎字寺前）墓地の切株からの枝桜と僅かになっている。



⑨ さなぶり

「さなぶり」は田植え終了の祝いで、最後の田植えの時、水口に今植えた苗と苗との間に、苗を7株（9株や12株の地域もある）植える。これを一同で拝んだ後、株を抜いて束ねて水洗いし「おまさま」に供える。最後の苗を神棚まんながに供える地域もある。夕食には馬、大神宮様、また、供えた苗や馬鋤にお神酒をあげ、皆で拝んでお神酒をいただいてごちそうを食べる。7月1日を「大きなぶり」と称して餅をつき、この日までに田植えを終わらせるのが慣習とされていた。現在も簡略化された方法にて行っている家庭もある。

⑩ 農業市のうぎょういち

農業市は毎年5月5日、観月台ため池周辺を会場として開催される。本町商工会主催で昭和33（1958）年から続くもので、近隣市町村から多くの人で終日にぎわい、町の年中行事として定着している。会場では、植木・盆栽・青果物・苗木・農業用具・日用品などが販売され、定期市（六斎市）の名残を見ることができる。

観月台ため池を含む周辺の豊かな自然環境や農作物への感謝と思いは、農業市がこの場所で連綿と続いてきたことを物語っている。

関連文化財群②（風土と生業） 主な構成資源



⑪ 徳江河岸^{とくえかし}

本町が幕府領となった寛文4（1664）年以降、国見一帯の年貢米は「御城米」と呼ばれ、江戸に廻米されることになった。徳江河岸は、幕府への年貢米（御城米）廻米のために必要な阿武隈川舟運の整備に伴い設置された河岸の1つであり、主に森山・東大窪（大木戸）・藤田・塚野目・徳江村の御城米の津出しが行われた。

村絵図等によると、河岸には積荷を行う船着場、御城米を一時保管する寄倉、河岸守宅等があり、寄倉は洪水の危険を避けるため、船着場から離れた高所に置かれる場合もあったようである。

写真：阿武隈川舟運図 ※福島市資料展示室所蔵



⑫ 西大枝深山神社の廻米絵馬^{にしおおえだしんざんじんじや かいまい え ま}

町指定有形民俗文化財

幕府領となって以降、信達地方の御城米は福島・桑折・徳江・東大枝などの阿武隈川の河岸から河口の荒浜港（現：宮城県亘理町）へと運ばれ、寒風沢港（現：宮城県塩釜市）を經由し海船に積替え、江戸浅草の幕府倉庫へと運ばれた。この廻米絵馬は、幕末期における西大枝の名主・佐藤浅次郎が荒浜港での大船への積替え作業の監督にあたったときの光景を、同村の画家・佐州（佐藤名平）に描かせたものであり、廻米の安全を祈って村の鎮守である深山神社（西大枝字宮ノ内）に奉納された。江戸時代の阿武隈川における廻米や舟運の状況を知る上で、数少ない貴重な史料となっている。



⑬ 養蚕絵馬^{ようさん え ま}

町内の各神社には豊蚕を祈って奉納された絵馬が散見される。光明寺御瀧神社の「養蚕図絵馬」（文久3〔1863〕年）、内容春日神社の「養蚕掃立図絵馬」（明治19〔1886〕年）が代表例として挙げられる。いずれも母娘が養蚕に励む様子を描くものである。

このほか、光明寺御瀧神社の「鼠除大蛇図絵馬」（明治43〔1910〕年）、「松と大蛇図絵馬」（奉納年不明）、藤田鹿島神社の「松に大蛇の絵」（奉納年不明）などはいずれも蚕の大敵の鼠を捕まえる蛇を描くもので、養蚕上族の際に鼠除けとして奉納されたものである。



⑭ 養蚕住宅^{ようさんじゆうたく}

養蚕は農家の伝統的な副業として居宅の一部を利用して行われ、農村経済を支える柱として発展した。養蚕住宅は、住居と蚕室を兼用した構造と、養蚕業の発展にしたがい改良された歴史を持つ。

蚕は湿気や暑さ・寒さに弱く、養蚕には採光・通風・保温の確保が必要不可欠である。このため本町の養蚕住宅では、蚕室を広く取り、かつ採光を確保する「あづま造」と呼ばれる屋根形式が普及した。また、換気を目的とした屋根頂部の気抜き設置、開口部を広く取ることによる通気性の確保、床下等に暖房用の炉を設置するなどの工夫も見られる。なお、養蚕住宅は時代がくだるとともに、二階が高くなり、茅葺は瓦葺・金属板葺に変わっていった。



信達地方における蚕室の特徴は、住居兼用の足場式二階である。本格的な二階蚕室を設けず、ナカノマ・ザシキに床から7尺位の高さで4寸角位の梁を前中後3か所にわたし、その上に厚さ1寸程度の足場板を臨時に張る。この方法は一階の炭火で二階まで暖められ、一・二階の上り下りが便利という利点があった。当初は中二階、後に普通の高さの足場式二階へと変化したという。

なお、畳敷のナカノマ・ザシキが蚕室化したため、囲炉裏は板張りのカッテに設けられ、家人は同室で食事をとることとなった。

関連文化財群②（風土と生業） 主な構成資源


15 旧佐藤家住宅 県指定重要文化財

旧佐藤家住宅は江戸時代中期の県北地方における本百姓の標準的な住居である。小坂字木八丁に所在したもので、昭和47（1972）年に現在地（藤田字観月台）へ移転復原された。

外観は間口七間、奥行三間、寄棟造茅葺で、間取りは入口からドマ、ナカノマ、ザンキ・ナンドと並ぶ三間取のつくりとなっている。東北地方の農家らしい簡素で素朴な形式を示す。また、ドマに立つ大黒柱や曲木を用いた梁、三方大壁の手法や出入口の大戸など、養蚕業が本格化する前の古い建築様式が残されている。


16 蔵（土蔵・石蔵・硯蔵）

農村地域における蔵は養蚕道具・桑葉の保管等に使用され、主屋とともにかつて養蚕業が隆盛したことを伝えている。

明治時代までは土蔵造によって蔵が建てられたが、大正時代以降、地元石工・伊藤柳太郎による石蔵建築技術の修得や養蚕業の発展に伴い石蔵が普及し、現在でも500棟を超える石蔵があり、本町固有の歴史的景観を形成している。

また、凶作の年に備えて米を硯のままで貯蔵する硯蔵も数多く存在し、農家の屋敷構えや農村集落全体の景観を形成する特徴的な建物といえる。


17 あんぼ柿・干場

干柿は伊達地方において明治時代より菓子類の一つとして製造されてきたが、昭和初期以降、硫黄燻蒸による製造方法が確立すると、見た目も美しく商品価値の高いあんぼ柿が本町でも盛んに製造されるようになった。10月に入ると、原料となる蜂屋柿・平種柿が町内をオレンジ色に彩り、11～12月の繁忙期には各地で無数のあんぼ柿が干される光景が、町の風物詩となっている。町内に散在する干場は本町の生業と深く関わるもので、蚕室を転用するものも存在するなど、地域固有の景観を形成する特徴的な建物といえる。


18 桃

町内では戦後、桑栽培から果樹栽培へと転換する農家が増えたが、昭和30（1955）年代後半から特に桃を作付けする農家が増加した。福島盆地の肥沃な土地に恵まれ、比較的寒暖差のある気候と、夏の日照時間の長さが甘くて色づきの良い桃を育てる。町内の農家は品質の良い桃を生産するため栽培技術の向上に励み、現在では全国1位（町村の部）の出荷量を誇る。30種類以上の品種が栽培され、7月から10月上旬頃まで収穫されている。


19 長ごぼう、長にんじん

阿武隈川沿岸には肥沃な土壌を持つ畑が広がり、ごぼう、にんじん、里芋、長芋等の根菜類の栽培が盛んである。特に川内地区で栽培される長ごぼう、長にんじんは、栄養豊富でやわらかい土の中で1mもの長さで育ち、野菜本来の甘味や旨味の強さが特徴である。

高速道路等の輸送手段が発達する昭和40（1965）年代以前は、生産者が籠に背負い列車に乗って仙台圏へも出荷し（鉄道行商人と呼ばれた）、「川内ごぼう・川内にんじん」の名が定着していた。町内では、いか人参や煮物などの郷土料理に好んで使われている。

関連文化財群③（資源と産業）

太古の大地がもたらした国見の産業史

― 窯業・鋳業・国見石の産業 ―

対象地域：全域

ストーリーの概要

本町の北部一帯に連なる山々の地質は、主に新第三紀の火山活動を起源とする安山岩質集塊岩と凝灰岩で構成され、安山岩質層の中に貫入する流紋岩質の火山砕屑岩の中には金・銀鋳床を胚胎している。山麓斜面から平地への傾斜地では、堆積物が分厚い地層を形成する扇状地や、凝灰岩類が露出する箇所が存在し、特に凝灰岩層は町内を縦断する東北自動車道の両側に広がりをもっている。平野部では、阿武隈川及び同水系の小河川により、堆積岩類と低位段丘・自然堤防が形成され、堆積層には風化した凝灰岩類に由来する粘土層が広く分布している。これら太古に形成された国見の大地・地質は、後世に勃興する様々な産業の源となった。

古代には粘土層が土器の材料として使用され、奈良・平安時代の窯跡として大木戸窯跡群（須恵器）、遠光原山窯跡（須恵器）、山居瓦窯跡（瓦）が確認されている。瓦や什器類は、律令制に伴い置かれた郡衙等の関連施設や徳江廃寺などで使用されたと考えられる。当時の人々にとっては、新しい時代の到来を体感させる産業の出現であった。

近世になると、桑折町の鋳床を採掘の中心とする半田銀山が本格稼働する。宝暦年間（1751～1764）までは山師の請負による稼行がなされ、享保年間（1716～1736）には小坂村の三郎兵衛や後に小坂村に移り住む野村勘右衛門が、元文年間（1736～1741）には森山村の佐久間六右衛門などが事業にあたった。宝暦6（1756）年以降は幕府の直営となり、日本三大銀山の一つとして幕府の財政を支えた。幕末から明治にかけての民営稼行時には、その初期に本町に所縁の深い早田伝之助が稼行し、小坂村の二階平坑口が盛んに利用されるようになる。以後、五代友厚の再興から昭和期の採掘まで、二階平坑口は半田銀山の主要な坑口の一つであった。また銀山の本格稼働に伴い、小坂村は鋳山を支える材木や鍛冶炭の供給地の一つとなった。町内域には遠方より鋳夫や技術者が集まり、鍛冶・醸造などの産業も栄え、代官所が置かれた桑折宿だけでなく、藤田宿にも多くの人や物、文化が集まりにぎやかさを増した。

凝灰岩の露出した場所からは石材が採掘され、耐火性に優れたその「国見石」は江戸時代以降、建築資材やかまど・囲炉裏等の材料として広く流通した。大正期には栃木県大谷石の石工技術を学んだ伊藤柳太郎を中心に石蔵建築が町内で始まり、柳太郎は旧小坂村産業組合石蔵に見られる建築技術の革新をもたらすと同時に、福島市の旧通信省電気試験所福島出張所や宮城県蔵王町の郷蔵など町外の石造建築にも携わった。昭和40（1965）～50（1975）年代の盛期には町内に20軒ほどの石を取り扱う店があり、石工たちは県中・県南地域まで石蔵の建設に出向いたことが知られている。町民の国見石への愛着に支えられ、今でも町内に500棟以上の石蔵や石造建築物が現存し、本町固有の歴史的な景観を形成するとともに、石工の高い建築・石材加工技術を今に伝えている。

これら窯業・鋳業・国見石の歴史は太古の大地が源となり、本町の発展を支えた。現在継続する産業はないものの、産業史を反映した国見特有の景観・歴史文化を形成している。

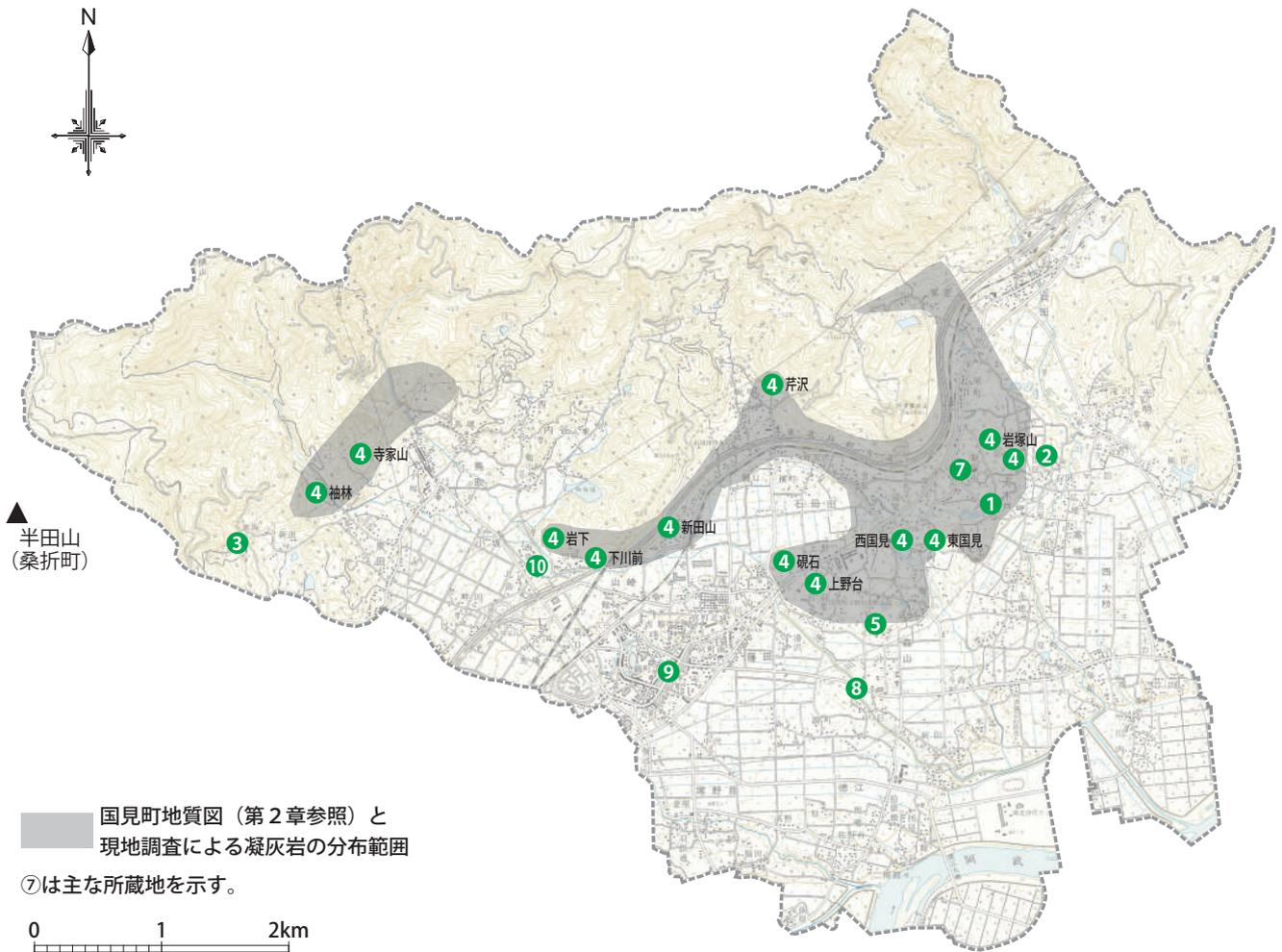


図 5-5 関連文化財群③ (資源と産業) 構成資源分布図

表 5-4 関連文化財群③ (資源と産業) 構成資源一覧

No.	資源名	主な年代
1	大木戸窯跡	奈良・平安
2	山居製鉄遺跡	平安
3	半田銀山二階平坑口跡	江戸～昭和
4	国見石 (採石場)	大正・昭和
5	森山第四号墳	古墳
6	石蔵・石造建築物	大正・昭和
7	石工道具	大正・昭和
8	伊藤家住宅石蔵	大正
9	奥山家住宅主屋・洋館	大正
10	旧小坂村産業組合石蔵	昭和

※「No.」欄を網掛けした資源は所在が広域にわたる、所在地が不明、所蔵が町内に無いなどの理由から地図上に示していない。

関連文化財群③（資源と産業） 主な構成資源



① 大木戸窯跡 町指定史跡

大木戸窯跡は8～9世紀（奈良～平安時代初頭）にかけて、須恵器の生産が行われた遺跡である。須恵器は焼物に適した粘土、豊富な燃料、河岸段丘などの斜面を利用した登り窯と呼ばれる竈窯が必要となるが、当該遺跡の立地条件は、これらの要件を満たしている。

高度な工芸技術を伴った当該遺跡の須恵器生産は、東北地方でも早い時期のもので、本町を中心として展開された伊達郡西部の古墳群や大規模な条里制遺構とともに、地域の古代史を解明する上での貴重な遺構である。



② 山居製鉄遺跡

山居製鉄遺跡は、製鉄を行ったタタラ遺跡で、炉跡が検出されるとともに、鑪の口や鉄滓が多数発見され、これらに混じって土師器が数点と竈穴住居跡1棟が確認されている。共伴した土器によると10世紀頃のものだと判断されている。

鉄は人類の生活にとって欠くことのできない材料となり、古代の製鉄技術は発達を遂げた。武具のほかに鋤・鎌などの農具の需要が多くなると山居遺跡のような製鉄遺跡が山間の溪流の流れる地域に数多く分布するようになった。



③ 半田銀山二階平坑口跡 町指定史跡

半田銀山の本格的開発は、上杉景勝領有の慶長年間（1596～1615）以降で、後に松平桑折藩や佐渡奉行所・桑折代官所の支配下に置かれた。天保年間（1830～1844）には、新鉱脈の発見によって大量の灰吹銀を産出し、石見・生野銀山とともに、日本三大銀山に数えられた。明治時代以降は民間所有となり近代化が進められたが、昭和25（1950）年に産出量の減少から休山となっている。

二階平舗は嘉永7（1854）年の開坑とされ、現在、桑折町・国見町を通じ、半田銀山跡に現存する数少ない坑口跡の一つである。



④ 国見石（採石場）

国見石は本町で採掘される凝灰岩である。火に強く、柔らかく加工しやすいのが特徴で、建築の外壁をはじめ、かまどや囲炉裏の敷石等にも使用される。

当初、石の名称を小坂石・西堂石・山崎石・石母田石・国見石など産地別の名で呼んでいたが、昭和15（1940）年に国見石と総称するようになった。主要な採石場は、昭和30（1955）～40（1965）年代の全盛期に12か所あり、全て露天掘りで行われた。町内には最盛期に20軒ほどの石材店があったが、現在は5軒が創業を続ける。



⑤ 森山第四号墳 町指定史跡

森山の条里水田遺構を見下ろした洪積台地を見下ろす森山丘陵（上野原）の南斜面に、円墳4基からなる森山古墳群があり、このうち、第四号墳は町の指定史跡となっている。

森山第四号墳は直径18m、高さ3.25mの円墳で、銀環・直刀・琥珀玉等が出土している。6～7世紀頃（古墳時代後期）のものである。

墳丘中央部に胴張り型の横穴式石室が検出されており、この玄門部を構成する袖石・榦石及び閉塞石には国見石の切石が用いられている。

関連文化財群③（資源と産業） 主な構成資源



⑥ 石蔵・石造建築物

本町には石蔵や石造建築物が市街地・農村部を問わず広く分布する。耐火、防湿、室内気温の一定化、冬～春季に吹く「半田おろし」と呼ばれる地域特有の季節風に対する防風などの効果から重用された。

本町の石蔵は大正時代から昭和戦前期は養蚕業の隆盛、豪農・豪商による米の備蓄に対応する形で、その数を増やすとともに大型化が図られた。戦後は農地解放や好景気に伴い一般に普及し、昭和40（1965）年代から石蔵の建築はピークを迎えた。なお、国見石は表面の加工方法で採掘や建築年代を推定することができる。



⑦ 石工道具

国見石は採石時の規格が主に2種類あり、奥行1尺（30cm）、横3尺（90cm）、高さ5寸（15cm）又は7寸（21cm）で切り出しが行われた。

採石は墨壺により縦・横の線引きから始まる。縦面と横面は「ホッキリツル」で溝を深め、石をおこすために、15cm程度の間隔で矢を入れる。これで石を割り「サシパ」などで不要な部分をだまかに削る。表面は「ツルメ掘仕上げ」で斜め模様を規則的に入れることで建物のトーンをつくり出している。



⑧ 伊藤家住宅石蔵

伊藤柳太郎は、石工職人である中野家の次男として明治10（1877）年に生まれた。幼少より石工の技術を身に付け、成人すると大工棟梁の家柄である伊藤家の養子となる。その後、栃木県宇都宮市大谷から石工を招き、石造建築の技術を修行した。

柳太郎は大木戸地区で採掘した国見石を使用し、大正6（1917）年、森山地区の自宅敷地に石造二階建の蔵を建築した。これが、本町における国見石を使用した石蔵建築の第1号となる。



⑨ 奥山家住宅主屋・洋館

国登録有形文化財

奥山家住宅は、本町の近代化に貢献した3代目奥山忠左衛門により、同家の迎賓館として大正10（1921）年に建てられた。純和風の主屋とルネサンス様式をベースとした洋館からなる。洋館の構造は木骨石造で内部に国見石が使用され、外壁はタイル張りとなっている。東日本大震災において一部損壊し、外壁のタイルがはがれた箇所において、内部の国見石の積み上げ状況が確認された。また、当該住宅の建築には、本町の石造建築の先駆けである伊藤柳太郎が携わっている。



⑩ 旧小坂村産業組合石蔵

国登録有形文化財

小坂村産業組合は、昭和15（1940）年に行われた米穀配給統制により、政府供出米の提供や管理のために設立された。同石蔵は穀蔵として米や麦等を貯蔵するため、昭和16（1941）年に建築された。町内で現存する最大級の石蔵である。

国見石による石積を壁体とし、外壁にはバットレス（控え壁）を設ける。内部の軸組・小屋組は木造で、小屋組はキングポストトラスを採用し、両端を挟み方杖で補強する。大規模建築を可能とするため考慮された構法であり、大変希少である。施工には本町の石蔵建築の先駆けである伊藤柳太郎ほか多数の石工が携わった。

関連文化財群④（信仰）

地域に根差した村々の祈り
—信仰を中心とした地域文化の伝承—

対象地域：全域

ストーリーの概要

本町には、江戸時代から続く16の村々に多様な信仰を中心とした地域文化が伝承されている。

旧村社をはじめとする町内各地の神社は、住民の協力活動により大切に維持管理され、祭礼等の活動は今なお受け継がれている。

貝田地区、川内地区ではかつて火災や水害に見舞われ、共同で身を守ってきた歴史がある。貝田地区の秋葉神社、水雲神社の祭礼は住民の「^{やど}宿」という制度により守られてきた。今でもお囃子や子ども神輿の巡行を介して親戚や地域と交流し、地元の習わしを伝えている。

川内地区の巖島神社の春の例大祭では、「あつかし太鼓保存会」により戦後途絶えていた山車の巡行を平成4（1992）年に復活させた。地区の女性たちは心を込めて郷土食を準備し、^{なほらい}直会の際に皆が一堂に会して味わう。除災、安全への願いとともに、地区住民の絆の強さ、共同の力を両地区の祭礼に見ることができる。

内谷地区の春日神社では、春の例大祭に明治時代から伝わる太々神楽が奉納される。神楽は無病息災、五穀豊穡を願い、神様の心を和ませるものとされる。同神楽保存会の楽人たちの熱心な指導により、若い楽人たちへその思いが脈々と受け継がれている。

藤田地区の鹿島神社例大祭は子どもを含めた氏子、若連、国見伝統文化保存会等の組織により約1か月の準備期間を経て執り行われる。勇ましいかけ声とともに激しくぶつかる神輿と山車が秋の旧藤田宿をにぎわせ、町の歴史的風致の維持・伝承にあたっている。

光明寺地区は、御瀧神社の湧水を中心に形成された集落である。現在も地区において水場や水路の維持管理を行い、水への信仰・祭礼の活動が継承され、世代を越えて貴重な歴史的風致・文化的景観を守っている。

観音信仰は町内各地で行われており、鳥取地区の信達三十三観音霊場福源寺地蔵庵観音堂における観音講の御詠歌の唱和や御堂の清掃活動、巡礼者へのもてなしにも昔の姿が残されている。また、全町的な信仰として阿津賀志山は古くから信仰の山とされてきた。江戸時代後期には三十三観音八十八大師画像碑群が建てられ、現在も当時の資料が町内各地に存在する。

「^{こう}講」と呼ばれる集団の活動は町内各地で昔から盛んであり、宗教や信仰上の目的を有するもののほか、経済的動機や社会的動機を持つもの等その種類は多岐にわたる。念仏講、庚申講、二十三夜講、おふくでん講等、現在も時代の変化に合わせてその目的や形態を変えながら継続しているものもあり、地域のつながりを醸成している。

このほか、かつて豊蚕を祈った絵馬や祈祷を行った道具、雨乞い信仰の民話などは今も大切に伝わり、農業に伴う農耕儀礼、子宝や安産を願う習わしなど、我々が営んできた祭礼や民間信仰が、多様に継承されている。

時代や世代を越えて伝承されてきた信仰や祈りによる地域の文化は、人々がこの国見の風土と密接な関係にある証である。今なお地域コミュニティの源泉・紐帯として住民の協働・連帯感・支え合いを生んでいるこれらは、未来へ伝えていかなければならない重要な歴史文化資源である。



図 5-6 関連文化財群④（信仰）構成資源分布図

表 5-5 関連文化財群④（信仰）構成資源一覧

No.	資源名	主な年代	No.	資源名	主な年代
1	鹿島神社例大祭	室町	17	最禅寺観音堂	江戸
2	水雲神社祭礼	—	18	福源寺地蔵庵観音堂	明治
3	秋葉神社祭礼	—	19	観音寺観音堂	江戸
4	巖島神社祭礼	—	20	光明寺三常院（阿弥陀堂）	平安
5	内谷春日神社祭礼	—	21	三常院木造阿弥陀三尊仏立像	平安
6	八幡神社祭礼	—	22	西堂薬師堂	江戸
7	（高城）国見神社祭礼	—	23	盆棚に供える料理	—
8	貴船神社祭礼	—	24	大千寺念仏講・沼供養	—
9	三吉神社祭礼	—	25	庚申講	—
10	内谷春日神社太々神楽	明治	26	二十三夜講	—
11	御瀧神社の湧水	—	27	おふくでん講（御福年講）	明治
12	滝普請	—	28	豊蚕信仰	—
13	阿弥陀垂水	—	29	農耕儀礼・信仰	—
14	阿津賀志山三十三観音 八十八大師画像碑群	江戸	30	小牛田山神社	江戸
15	観音信仰（観音霊場）	江戸	31	小坂子育て地蔵	—
16	観音講	江戸	32	オシンメサマ	明治
			33	絵馬	江戸・明治

※ 「No.」欄を網掛けした資源は所在が広域にわたる、所在地が不明、所蔵が町内に無いなどの理由から地図上に示していない。

関連文化財群④（信仰） 主な構成資源



① かしまじんじやさいい 鹿島神社例大祭 町指定無形民俗文化財

鹿島神社例大祭は、旧奥州街道藤田宿を中心に毎年10月の第4金曜日と土曜日の2日間と前夜祭が執り行われる。

約1か月前から運営等の準備、山車の組立・修繕、お囃子・太鼓の稽古にかかり、1週間前になると幣束が町内に掲げられる。

例大祭当日の昼は神輿と山車4台がお囃子とともに町内を練り歩き、御旅所では稚児舞や剣の舞などの神事が行われる。最終日の夜は、山車と山車が神輿を挟んでぶつかる「もみ合い」が還御まで繰り返され、沿道は多くの人々にぎわう。



② すいうんじんじやさいい 水雲神社祭礼

旧貝田村の村社である水雲神社では、毎年10月中旬の日曜日に祭礼が行われる。貝田地区の祭礼は神社会・町内会に加え、「宿」と呼ばれる10軒の家主が中心になって運営される。宿は1年交代による輪番制で、中でも「大宿」の家がそのとりまとめを行う。

かつては祭礼の前日に「大宿」の家に祭神（御神体）を移し、神職とともに一晩泊め、当日に大宿の人々が御神体を背負い、幟を持つ宿の人々と渡御する神事が行われた。御神体は、大宿以外の宿まわり、家内安全・息災や子孫繁栄を祈った。



③ あきはじんじやさいい 秋葉神社祭礼

貝田地区に所在する秋葉神社は、文政10（1827）年に現在地へ遷座された。毎年4月中旬の日曜日に祭礼が行われ、大火が続いた貝田の火伏の神・鎮火守護として家内安全と五穀豊穡が願われる。

祭礼では、神職による祝詞の後、子ども山車の巡行が行われる（かつては大人によって山車が運行された）。お囃子は地元子ども会を中心とした貝田子ども太鼓同好会によって受け継がれている。



④ いつくしまじんじやさいい 巖島神社祭礼

旧川内村の村社である巖島神社では毎年4月に、水害もなく平穏で豊穡な年になることを祈願し、春の例大祭が行われる。平成元（1989）年に「あつかし太鼓保存会」を結成し、戦後途絶えていた山車やお囃子を平成4（1992）年に復活させ、現在も地区の子どもたちが大切に受け継いでいる。直会では地区の女性たちが準備した川内ごぼうの煮物や豆腐ごはんなどの郷土食が振る舞われ、参加者が一堂に会して味わう。かつて阿武隈川の洪水から身を守るために培われた人々の結束の強さが継承されている。



⑤ うちやかすがじんじやさいい 内谷春日神社祭礼

旧内谷村の村社である春日神社では、毎年4月に春の例大祭が行われ、無病息災、五穀豊穡を願い、神楽殿において太々神楽が奉納される。また4年に一度、2日間にわたる神輿渡御が行われ、子どもたちと一緒に山車も地区内を練り歩く。

関連文化財群④（信仰） 主な構成資源



ほちまんじんじやさいれい
⑥ 八幡神社祭礼

旧塚野目村の村社である八幡神社では、毎年4月に春の例大祭が行われる。いくさ神として信仰され、戦争中は戦勝祈願のために八幡様めぐりでにぎわった。また、干ばつ時に降雨を祈願する雨乞いが昭和59（1982）年まで行われており、水の神様としても地区住民の信仰を集めている。



たかぎ くにみじんじやさいれい
⑦（高城）国見神社祭礼

高城地区に所在する国見神社は、毎年4月と11月に例大祭が行われる。中世には大窪村の村社であり、その後、旧大木戸村、旧高城村の村社となった。4年に1度、11月の例大祭には神輿渡御が行われ、現在の大木戸、山根、高城地区からそれぞれ山車が出され地区内を巡行する。



きふねじんじやさいれい
⑧ 貴船神社祭礼

旧泉田村の村社である貴船神社では、毎年4月に春の例大祭が行われる。4年に一度、神輿渡御が行われ、山車も地区内を練り歩く。江戸時代に京都の貴船神社の御分霊を勧請した、二柱の神を祀る神社であり、水の神として地区の信仰を集めている。



みよしじんじやさいれい
⑨ 三吉神社祭礼

石母田地区に所在する三吉神社は、毎年4月と11月に祭礼が行われる。春季大祭は五穀豊穡を祈願し、秋季例祭は収穫に感謝する。神前での剣舞、神楽殿で日本舞踊などが奉納され、来場者にお神酒等のおふるまいを行う。清水（霊水）が湧き出て、水神をお祀りしたのが創始であると伝えられている。



うちやかすがじんじやだいかぐら
⑩ 内谷春日神社太々神楽

町指定無形民俗文化財

内谷春日神社に伝わる太々神楽は三春地方から伝来した出雲系神楽で、明治15（1882）年の秋季例祭で初めて披露された。

戦中戦後の社会情勢の変化や後継者不足によって中断された時期があったが、氏子一同の消滅を惜しみ復活を望む声が強くなり、昭和57（1982）年に太々神楽保存会が設立された。

現在、古老楽人の熱心な指導と若い楽人の献身的な努力により舞数26座を保存継承し、毎年4月第3日曜日に伝統ある神楽が奉納されている。

関連文化財群④（信仰） 主な構成資源



⑪ おんたきじんじや ゆうすい 御瀧神社の湧水 町指定天然記念物

御瀧神社の縁起は不明であるが、江戸時代には「稻荷大明神」と呼ばれ、集落の根源である水を祀り五穀豊穡を願う神社として古くから存在していた。

湧水は古くから湧き、下流域の山田遺跡からは縄文時代の生活の跡が発見されており、今でも約21haの水田のかんがい用水として使われている。「大滝」「小滝」と呼ばれる境内の神池には大きな梵天（幣束）が祀られており、豊かな稲のみのりを水神に祈った古い信仰の形を伝えている。



⑫ たきぶしん 滝普請

御瀧神社の湧水は、光明寺集落の生活・恵み・祈りの源であり、集落の人々によって大切に維持・管理が行われ、利用されてきた。

毎年4月の御瀧神社祭礼の1週間前には、「大滝」「小滝」と呼ばれる境内の神池の水を抜き、周辺水路とともに掃除を行って清めた後、神池に梵天（幣束）を立てる滝普請を行う。年に1度の滝普請に地元町内会を中心に多くの住民が携わる。



⑬ あみだらすい 阿弥陀垂水

御瀧神社の湧水池である「小滝」に隣接する三常院阿弥陀堂では本尊の下に湧き出る水を「阿弥陀垂水」と呼んでいる。眼病や皮膚病に効果があるという言い伝えがある。

定期的に水場の清掃・管理が行われ、阿弥陀垂水の利益を求める人々の利用にこたえている。



⑭ あつかしやまさんじゅうさんかんのんのはちじゅうはちだいがぞうひんぐん 阿津賀志山三十三観音八十八大師画像碑群 町指定有形民俗文化財

嘉永6（1852）年頃、伊達郡二野袋村（現：伊達市梁川町）の行者・佛源（属名源右工門）の発願により、坂東三十三観音、四国八十八大師、西国三十三観音の画像を安置するため、阿津賀志山東麓、奥州街道国見峠周辺一帯の地に大師堂と草庵を建立した（大師堂と草庵は現存しない）。

画像碑群は佛源の資金集めのため、信達両郡の村々をめぐる助成奉加を呼びかけ、その恩恵として一石に一体ずつの尊像を線刻し大師堂の周辺地に建てたものである。なお、画像碑群のほか、大師像・趣意を刻んだ版木類・幟などが現存する。



⑮ かんのんしんこう かのんれいじょう 観音信仰（観音霊場）

福島盆地における観音信仰は、豊蚕の願いと結び付き、江戸時代後期以降の養蚕業の勃興とともに発展してきた。本町には、観音霊場巡りの寺院が9か所存在し、観音信仰が広く残されている。

- 信達三十三観音 : 小坂松蔵寺（第20番）、鳥取福源寺（第21番）
- 伊達秩父準三十四観音 : 光明寺三常院（第16番）、徳江観音寺（第30番）、
貝田最禪寺（第31番）、西大枝西松寺（第32番）、
川内仲興寺（第33番）
- 信達坂東三十三観音 : 泉田泉秀寺（第27番、第28番）、
山崎長泉寺（第29番）

関連文化財群④（信仰） 主な構成資源



かんのんこう
①⑥ 観音講

観音菩薩を安置する寺院では、地域住民によって念仏・御詠歌・御堂の清掃活動などを行う観音講（又は梅花講）が結成された。本町内で現在も行われている代表例として福源寺（鳥取）・最禪寺（貝田）・長泉寺（山崎）・観音寺（徳江）、西松寺（西大枝）がある。

特に福源寺観音講（現在は「観音様を守る会」）では、念仏・御詠歌・清掃活動のほか、巡礼者に対して隣接する公民館（かつては「お茶場」と呼称）にて、御朱印の押印とともに野菜・山菜などを用いたもてなしを行っており、かつての活動を色濃く残している。また、西松寺梅花講では、告別式で死者との別れを惜しむ御詠歌をあげている。



さいぜんじ かんのおんどう
①⑦ 最禪寺観音堂

最禪寺は旧奥州街道貝田宿沿いに所在する曹洞宗寺院である。

本堂内には柿葺の小さな観音堂が安置されており、伊達郡秩父準三十四観音の第31番札所として信仰を集めるとともに、貝田の人々によって観音講が組織されている。観音講では30名程の講衆が春と秋の彼岸時に観音堂前に集まり、読経・御詠歌を上げる。

子育て観音としても信仰され、子どもの健やかな成長を願う木製の人形（木ぼっくり）が子どものいる家庭に貸し出される。講中の人々は、人形の衣装や頭巾を手作業で作って奉納している。



ふくげんじ じ ぞうあんかんのんどう
①⑧ 福源寺地藏庵観音堂

町指定有形文化財

鳥取字鳥取に所在する福源寺地藏庵観音堂は、信達三十三観音霊場の第21番札所である。江戸時代から観音講の活動が行われ、現在も観音堂を管理する集落の人々がお茶場で巡礼者を温かく迎え入れる「お接待」の風習が残されている。

現在の観音堂は明治8（1875）年に再建されたもので、土蔵造の本体に四面庇と向拝が付く。内部には、明治9（1876）年に描かれた花や鳳凰の天井絵が描かれ、透かし彫りの彫刻などの装飾が施されている。正面板戸の裏には「山口村 棟梁右源次」の墨書が確認できる。



かんのんじ かんのおんどう
①⑨ 観音寺観音堂

徳江字中ノ内に所在する観音寺は、真言宗豊山派の古刹である。

観音堂は聖観音菩薩を本尊とし、脇侍に毘沙門天立像、不動明王立像を配置した仏堂である。本尊の制作年は不明だが、渡来佛の趣がある。秘仏として30年に1度の開帳を行っている。

建物は棟札より享保3（1718）年の建築と明らかである。外観は二手先組物、二軒平行繁垂木を用いる形式の整った仏堂であり、町内随一の規模である。

地域住民による観音講が組織されており、現在も観音様に御詠歌をお供えし、地域の安全や家族の安心を祈る。



こうみょうじさんじょういん あみだどう
②⑩ 光明寺三常院（阿弥陀堂）

光明寺字鹿野に所在する三常院は、貞観元（859）年、堯養により高寺山（現在の御堂背後の山）に創建され、元慶年間（877～885）に焼失し現在地に移されたと伝わる。現在の阿弥陀堂は文政2（1737）年の再建とされ、本尊及び脇侍である木造阿弥陀三尊仏立像（町指定有形文化財）を安置する。

江戸時代には、住職が御瀧神社の湧水（大滝・小滝）の管理を担うとともに、伊達秩父準三十三観音の巡礼地（第16番札所）としてなど人々の信仰を集めていた。

関連文化財群④（信仰） 主な構成資源



②① さんじょういんもくぞうあみださんぞんぶつりゅうぞう 三常院木造阿弥陀三尊仏立像 町指定有形文化財

三常院木造阿弥陀三尊仏立像（町指定有形文化財）は、16世紀の制作と考えられる阿弥陀如来・観音菩薩・勢至菩薩の三尊立像である。元文2（1732）年に会津若松城下の仏師により補修されたとの記録が中尊の胎内に納められた『御再興略縁起』に記されている。同縁起には、平安時代末期の制作とされ、慈覚大師の作と伝わる。「三常院が野火で焼失した際には自ら飛び出す」、「突然後光が輝きわたった」などの伝承が伝わり、長く地域の信仰を集める仏像である。三尊とも背面に焼痕が残り、伝承との関係性をうかがえる。



②② さやどうやくしどう 西堂薬師堂

内谷地区に所在する西堂薬師堂は、薬師瑠璃光如来を本尊とした仏堂である。薬師如来は瑠璃光を以て衆生の病苦を救うとされ、無明の病を直す法薬を与える医薬の仏として信仰を集めた。

地元では当該薬師堂はこの地に落ち着くまで、伊達家の守護神として勧請されていたと伝わる。現在の建物は三間四方宝形造で、安政年間（1854～1860）の移築とされる。

地域では、とりわけ耳目の病を癒すといわれ、信者が奉納した穴あき石が建物に数多く掛けられている。



②③ ぼんだな そな りょうり 盆棚に供える料理

盆（毎年8月13～15日）は家によって仏壇に提灯を下げ、新たに簡易の仏壇盆棚を設ける所もあり、蓮の葉（又は里芋の葉）の上になすやささぎ、洗い米、砂糖醤油のすいとんなどの料理を供え、柳の枝のはしを準備する。

14日の朝は仏壇と同じ供え物を食す。盆の食事は各家庭によって様々だが、精進料理が多く、ぼたもち、混ぜご飯、そうめん等を食するというように、各地域・各家庭の特徴を有した年中行事と行事食が残されている。



②④ だいせんじねんぶつこう ぬまくょう 大千寺念仏講・沼供養

旧藤田宿に所在する大千寺では、春と秋の彼岸に念仏講が行われている。

平成5（1993）年まで観月台ため池の「沼供養」でも念仏講が行われていた。「富溜池水死者之精」と書かれた塔婆をため池周辺に建てて、住職の読経と鐘の音に合わせて「南無阿弥陀仏」と念仏を唱えながら観月台公園を一周することで、沼で亡くなった人たちの供養を行っていた。

現在は、平成8（1996）年に結成された大千寺感動会婦人部が毎年2回本堂で念仏と鐘の音に合わせて数珠をまわしている。



②⑤ こうしんこう 庚申講

庚申講は道教に基づく民間信仰で、体内に住む三戸の虫が庚申の日の夜、寝ている間に天に登って天帝に悪事を報告することを防ぐため、徹夜でお籠りをする行事である。それがいつしか養蚕の神として信仰されるようになり、町内の寺社の境内には庚申塔の建っていない所はない程に信仰された。森山地区の中ノ目集落では、現在も4軒の講中により活動が続いており、毎年最初の庚申の日の晩に宿主宅に集まり、神棚を拝み会食を行っている。徹夜はせず、午後8時半頃には終了する。

関連文化財群④（信仰） 主な構成資源



にじゅうさん や こう
②6 二十三夜講

二十三夜講はお産や蚕の神様といわれ、正月・五月・九月に女性だけが集まり月の出を拝んだり、男性が新しいわらだを1枚編み団子などを備えたり、各地区で様々な形式で行われていた。泉田上町内会では、「二十三夜様」や「山夜様」と呼び元来1月23日に女性のみが集会所に集まり、半田銀山で働く夫の無事と産婦の安産を祈願して、妻たちが夜通し飲食し満月を拝んだ。

昭和30（1955）年頃からは宿泊することはなくなり、現在は昼に集まって会食や歌などを楽しむ。会食では玉子酒を振る舞い、余った料理は子どもが生まれる人に持ち帰ってもらう。



こう おふくねんこう
②7 おふくでん講（御福年講）

おふくでん講は、かつて1月24日の夕刻に宿主宅に集まり、泊まりがけで行われ、翌日入浴などして身を清めた後、数種類の餅や料理を作って食べ、にぎやかに談笑するという女人禁制の講であり、町内各地で盛んに行われていた。

藤田地区の山崎館町内会及び山崎小館町内会では、「御福年講」という名称で現在も継続している。

山崎館町内会では、「おがみ講」という愛称で呼ばれ、明治22（1889）年からの記録帳が残る。山の神を祀り、各戸の男性1名が参加し宿の持ち回りにより行われていたが、社会情勢の変化により、昭和38（1963）年から名称を「館屋敷御福年講親睦会」に改め、宿主宅への宿泊はせず、女性の参加も可能とした。現在は毎年1月最後の日曜日の昼に山崎公民館にて会食を行っている。

山崎小館町内会においても、明治23（1890）年から実施していたことがわかる「御福年講中台帳 小館熊野前屋敷」が残り、昭和38（1963）年に山崎館町内会同様の講中慣例の改正がなされた。また平成8（1996）年からは、宿の持ち回り制を廃止して広く参加を募り、水雲神社（山崎字宮前）において開催する町内会の新年会に移行した。平成18（2006）年からは場所を飲食店に移し、毎年1月末又は2月初めの日曜日の昼に開催している。



ほうさんしんこう
②8 豊蚕信仰

旧来の養蚕は不安定な産業であり、蚕は「運虫」「神の虫」として扱われ、江戸時代後期以降に学問的研究が進んでも養蚕家は神仏に豊蚕を祈った。

豊凶・桑の過不足・各種方位などについて、法印・巫女・「オンメサマ」による祈禱を行ったほか、深山神社（鳥取）・沼田神社（徳江）・八幡神社（小坂・稲荷神社）・巖島神社（川内）・御瀧神社（光明寺）などには夜風除け・ネズミ除けの信仰があり、幣束などを持ち帰り、被害に備えた。



のうこう ぎらい しんこう
②9 農耕儀礼・信仰

農村地域では、農耕神を祀る習俗として様々な儀礼を行った。

年頭の鳥追いやどんど焼きなど左義長の行事は予祝祭の性格を持つ。水口祭みなくちまつりにおいては、水口に桃や山吹の枝を挿し、水口ごうを立て、焼米をまいて拝んだという。田植え前後には田の神の迎え・送りを行い、稲刈り終了後はさなぶりやびっきの餅の行事が行われる。虫供養も農耕儀礼の一つといえる。早ばつの際は雨乞いの力に頼った。農耕に関する禁忌習俗も数多く存在する。これらの形態は地域によって様々であるが、農家経営が難しい今日、農業とともにその多くは失われつつある。

関連文化財群④（信仰） 主な構成資源



こごたやまじんじや
③⑩ 小牛田山神社

森山字東新田に所在する小牛田山神社は、江戸時代後期に森山の百姓・石川義兵衛が度重なる妻の難産を除こうと、仙台領遠田郡小牛田山神社まで月参りを数年行い、神社別当から分霊の許可を得たもので、信心の末に安産に至ったと伝わる。社殿は義兵衛の私塾の塾生らが資材・労力を提供し建設されたもので、文化年間（1804～1818）の勧請と伝わる。安産の神様を祀り、お産が近い婦人が神社に奉納されている枕を1つ拝借し、お産がすめば2つにして返す慣習がある。枕は赤・白2色があり、男子が欲しい人は白、女子が欲しい人は赤を借りるといふ。



こさかこそだじぞう
③⑪ 小坂子育て地蔵

小坂の子育て地蔵（小坂字カニ坂）は、子どもの重病を癒していただいたお礼に、親が手彫りのお地蔵様1軀を彫って納めて以来、全部で16軀に増えたという。

旧暦の9月15・16日に行われる祭礼の際は、地蔵に新しい着物を着せて木製の箱車に乗せ、小坂地区を子どもたちにひかせる風習がある。以前は半田・桑折・藤田まで遊行したという。また、子どもが病床に伏せると、小坂の地蔵尊を拝借し自宅に持ち帰る風習もあった。信仰圏は全国に及ぶが、祭礼前日までには必ず返って来るといふ。



③⑫ オシンメサマ

オシンメサマは主に東北地方で信仰される家の神で、蚕の神、農業の神などとされている。巫女などがこのご神体を両手にとって打ち振り、神を憑依させ、病や縁談、蚕や農作物の出来などのお告げをしていた。

町内では高城地区にて昭和20（1945）年代頃までこのような霊媒が行われていたと考えられ、明治時代から伝わるご神体を所有する家では、現在でも神様として大切に保管している。



えま
③⑬ 絵馬

庶民信仰の多岐複雑さは、旧来の信仰絵馬のほかに、多種多様な画題を生みだした。

本町では、生業祈願として舟運の安全を願った廻米絵馬、豊蚕を願った養蚕絵馬・鼠除け絵馬などが散見される。県北地方は文芸の盛行した地帯で、本町には（高城）国見神社宝楽俳諧奉額（町指定有形民俗文化財）に代表される発句歌額が多い。また、福島県は著名な和算家を輩出しており、本町には（高城）国見神社奉納算額（町指定有形民俗文化財）が確認され、一特色をなしている。